

せい か ほう まさ
星 火 方 正

～燎原の火は方正から～

この人にしか語りえない喜びと悲しみ—引間政好さんの講演を聞いて— 滝永 登
ふたつの苗字 今村 寛明
国境の街、黒河からの逃避行—中国残留孤児にならなかつたボク 宮岸 清衛
中国残留日本人の孫たちと学んできた「満州」・戦争 飯島 春光
王希奇「一九四六」高知展を開催するにあたつて 崎山 ひろみ
『エスペラント——分断を繋ぐホーマラニスモ』を上梓して 大類 善啓



王希奇さんの大作「一九四六」。葫蘆島から引き揚げる日本人たちを描く
中国錦州市生れの画家・王希奇さんは墨絵の要素を西洋絵画に自然に融合させた画風で
評価されている。この「一九四六」の作品展が今年11月末から一週間ほど高知で開催され
る。詳しくは本誌に掲載されている崎山ひろみさんの原稿、「王希奇『一九四六』高知展を
開催するにあたつて」をお読みください。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「^{ほうまさ}方正友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正 (第32号 2021年5月刊) ~燎原の火は方正から~

目 次

この人にしか語りえない喜びと悲しみ —引間政好さんの講演（対談）を聞いて—	滝永 登	1
とても貴重な会話と記録書でした <方正へ そして方正を後にして>の引間政好さんの体験を読んで	柳生 じゅん子	3
詩 ダリア	//	5
替え歌——「ラバウル小唄」	//	6
ふたつの苗字	今村 寛明	8
国境の街、黒河からの逃避行 —中国残留孤児にならなかつたボク—	宮岸 清衛	10
中国残留日本人の孫たちと学んできた「満州」・戦争	飯島 春光	13
今、振り返ってみると	大島 満吉	23
王希奇「一九四六」高知展を開催するにあたって	崎山 ひろみ	29
満州の歴史を語り継ぐ高知の会について	大野 正夫	35

東日本大震災からの 10 年間を振り返って	堀 泰雄	37	
パンデミックの先へ ——これからの世界と日中関係にかける私の思い	木村 知義	42	
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			
『エスペラント——分断を繋ぐ HOMARANISMO』を上梓して	大類 善啓	48	
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			
冷静さと考える力 養って	(朝日新聞より転載)	澤地 久枝	51
共生阻む言葉の壁 中国残留孤児ら 孤立する晩年 (東京新聞より転載)	木原 育子	52	
王林起さんの赤とんぼ	(朝日新聞より転載)	平井 良和	54
書評 『夜の歌 (上・下)』	〃	丸山 至	55
書評 『毛沢東の大飢饉』	(日中友好新聞より転載)	渡辺 裕	56
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			
——「方正友好交流の会」へのお誘い——	方正友好交流の会	57	
報告／編集後記		58	

この人にしか語りえない喜びと悲しみ

——引間政好さんの講演（対談）を聞いて——

滝永 登

2020年7月26日、旧満州引き揚げ者の引間政好さんの講演（対談）を聞くという貴重な機会を得た。引間さんは、1941（昭和16）年、日米開戦の年に6歳で満州にわたり、1953（昭和28）年18歳で引き揚げるまで、少年期から青年期にさしかかる12年間を彼の地で過ごしたという。それがどんな時代であったかは、私たちは歴史の教科書で学ぶことはできる。しかし、教科書には決して書かれない一人ひとりのかけがえのない喜びと悲しみは、その人にしか語りえない。

濃淡あふれる語り

講演（対談）を聞いて印象に残ったことの一つが、少年時代の楽しかった思い出については、具体的に生き生きと語っていたことだ。豊作で金がもうかり広い家を新築したこと、そのときは辛かったのだろうが過ぎてしまえば楽しい思い出の草刈り作業など、当時の内地の人々から思えばうらやましいほどの、戦争とはまったく縁のない日々を送っていた様子が伝わる。それに反して、長く苦しかった逃避行や戦後の敗戦国民としての生活の様子は、淡々と、ときには他人事のように語っておられた。思い出したい記憶と思い出したくない記憶があるのだろう。当たり前だ。小学生の少年である。それでなくても、人は自らの記憶を操作しながら生きていく。時にはなかったことにし、時には後付けの知恵で脚色しながら。私以上の世代の多くが「三丁目の夕日」を「よき時代」と振り返るくらいなのだから。

引間さんが、もう一度明るい表情で語り始めたのは、引揚船で日本に戻ってきたときのことからだ。最初のひと言「日本という国が緑に見えた」というのは、私の乏しい海外旅行体験からもうなづける。引間さんにとっては、実際の色彩以上のものだったのはまちがいない。そして、故郷の秩父に帰つてみると、死んだと思っていた長兄と再会するという、まるでドラマのラストシーンのような光景で話は終わる。聞き終えた私自身も、なぜかほっと胸をなでおろす。

初めて知る「満妻」（マンツマ）という言葉

もう一つ気になったことは、「満妻」（「マンツマ」と発音していた）のことだ。初めて知った。現地の中国人と結婚し、おそらくそのまま現地に残った女性たちのことだ。千人の単位でいたというのだから（数字の根拠は不明）、必ずしも特殊な事例ではなかったのだろう。人と人との出会い、そういう人たちの中から結婚を選択する人がいてもそのこと自体は何ら不思議ではない。「残留孤児」とはちがって、何がしかの強制やうそがあったとしても、最後は自らの意思による選択だったのだろう。ただ、どういう事情で結婚を選択したのか（せざるをえなかったのか）、その後の人生の軌跡がどのようなものであったのか、「満夫」の存在も含めてもっと知りたい。このままでは歴史にうずもれてしまうしかない。

歴史に向き合う

船戸与一『満州国演義』では、「満蒙領有論」が「独立国家樹立論」へと変遷していく過程が、かなりていねいに描かれている。「五族協和、王道樂土」の理想を本気で実現しようとしていた人たちがいたことを書き残しておきたかったのだろうか。独立国家の実態がどんなものだったかは、後の世に生まれた私たちはよく知っている。しかし、それにしても当

時の日本国民は独立国家に対する敬意がなさ過ぎた。関東軍軍人や満鉄社員のふるまいは言うに及ばず、開拓団の人たちにしても大差はなかったはずだ。自国領土でもない独立国を「生命線」などと勝手に呼び、それを守るためにと称してついには戦線を太平洋にまで広げてしまう。

日本政府は、公式な場面では今も「先の大戦」という用語を使う。いつまでこの言い方を続けるのか。「日本人とアジアの人たちとの間では、歴史認識のちがいにより対話が成立しにくい」などという人がいる。はたしてそうか。対話が困難だとすれば、その原因は歴史認識が異なるからではなく、そもそも私たち日本人に歴史認識などないからではないのか。

「先の大戦」などということばで何かをごまかそうとし続ける限り、そう思わざるを得ない。満蒙開拓につながるあらゆる問題は、日清、日露の戦争から始まる。50年間を見通した歴史に向き合う作業は今からでも遅くはない。

310万の死者を想う

日本人は、「先の大戦」で軍人、民間人あわせて約310万人が死んだ（殺された）と言われている。その約9割が1944年以後だという（吉田裕『日本軍兵士』）。さらに、戦場で死んだ兵士約230万人の半数以上は、直接的な戦闘以外の原因、すなわち餓死、病死、自殺、正規の手続きによらない処刑などだったという（藤原彰『餓死した英靈たち』）。さらに忘れてならないのは、民間人80万人の死は、その大半が1945年に集中していることだ。3月東京大空襲の惨状を目撃したりしながら、日本政府、軍部の指導者たちは「たいしたことない」と言ってのけたという。なんと彼らの罪は重いことか。せめてそのとき、「大変なことだ」とまともな判断を下していれば、その後の沖縄、広島、長崎そして満州での悲劇は、ごとく避けることができたのだから。

「戦後の平和と繁栄は、多くの尊い犠牲の上にある」というしばしば繰り返されるこのことば。因果の論理がまったく不明であることはおいておくとしても、「尊い犠牲」がこの310万人の死を指しているのだとすると、何ともむなしい。

昨年（2020年）7月に亡くなった弘田三枝子のヒット曲『人形の家』の作詞者なかにし礼（2020年12月死去）は、この歌は満州棄民のことを思いながら作ったと語っていたことがあるという（吉永みち子談）。そういわれてみると、「私はあなたに命をあづけた」という、失恋の歌にしてはやや重過ぎるフレーズも腑に落ちる。

（たきなが・のぼる：1950年生まれ。学生時代に国際共通語エスペラントに親しみ、東京学生エスペラント連盟に参加。1974年東京都庁に就職。その後定年で退職、今も細々と現代史を学び続けている。）

とても貴重な会話と記録書でした

<方正へ そして方正を後にして>の引間政好さんの体験を読んで

柳生 じゅん子

この度、『「開拓団員」、引間政好さんの体験を聞く』に、とても胸を打たれました。1ページ目の「引間政好さんのプロフィール」から驚いて赤ペンを引きながら拝読しました。

聞き手の大類善啓さんが「今日私がどこまで引間さんのお話を引き出せるか、語って頂けるか……いろいろな体験をお聞きしたいと思います」と始められ、目を引き付けられました。

引きつけられた具体性ある体験談

引間さんは、満洲に開拓民として家族で行かれたのは6歳の時。在満国民学校に入学したのは小学校1年生だというのに、とても詳しい情況を具体的に語られています。大類さんが「この国民学校では生徒は何人くらいですか」と聞かれると「全校で126人です。その頃は朝鮮族と一緒にね、高等1年、高等2年の上級生では朝鮮の人が13,4人いました」にびっくり！ 小学1年生の時のことを、このように覚えている頭の良さです。

「朝鮮族の人たちとは、仲良くやっていましたか」と問われると「もう最高に良かったですよ。芸も達者でね」と、明るいお声が聞こえてきます、だからこそ良き思い出として心に残っていたのでしょう。この辺りから大類さんは、とても身近で、心身ともに寄り添った質問をされていることに感じ入り、赤ペンと共に丸じるしも付けて拝読しました。

引間さんの一番の思い出は、開拓団でもらった家と共にわが家が建ったこと。敗戦後、立ち場は一転して忘れられない出来事になられている。さらに大類さんは思いの籠った的確な質問をされていきます。それに答えて引間さん一家8人が1941年3月に、渡満記念に撮った写真と共に、ご家族が次々と死亡された現実の辛さ。さらに敗戦間際の日々が近場になって、兄達が召集される。けれどお父さんが自分の家だからとなかなか家を出なかったため、一人で逃げていかれた独立心の強さと悲しさに胸を突かれました。

引間少年の告白に胸が痛む

家族と再会後も長姉の方と子供は殺され、また一人で開拓団の人達に合流して移動されます。けれど、その時の苦悩と恐い事件を語られます。私が開拓団の方々の本を読んだ時、度々出会った恐い話。中国人に襲われると、鉄砲を撃ち合って戦う。幼い子供は、集団逃避には足手まといになるので、自分の家の人に殺されたり、多くの人の餓死。その現実に実際に出会った少年の時の告白に、とても胸が痛くなりました。

そして長兄のお嫁さんが満妻になり、一緒についていった後、お母様と共に逃げた後亡

くされます。まだ11歳の時にさらに移動していく強さと、4年半も働かれて、感心と共にやはり胸痛くなりました。ただその後学校へ通い寄宿舎に入れたこと。新宅さんや優しい方々に出会ったことの嬉しさに心が緩みました。私の年上の友人の方も、父親の仕事の関係でそれを中国の人教え引き継がせる為に、家族も共に1年以上残された時のお話しつと重なりました。色々と体験されても、多くの子供は辛すぎて話したくない、思い出したくない。忘れない事を、よく語られて頭が下がります。また新宅さんとの交流が続いて引間さんを方正の会に紹介されたとのこと、何よりでした。最後まで胸いっぱいになることがありました。

記憶の確かさに驚く

会の記録が終わった次のページの「今が最高に幸せだ！」の大類さんの初めの文章に驚きました。（方正の会の後、引間さんの『我的故郷』（私の故郷の意味）という自分で書かれた小冊子が送られてきた。その後自宅がある我孫子市の天王台に行き、原稿の確認を含めて補足取材を行ったのでご報告したい）に感動しました。

冊子を読まれて再会し補足取材を行われたことはとても良かったと思いました。

ともかく、とても心のこもった質問と引間さんの心が開かれて、いい会話になったのだと思います。引間さんは小冊子を作られたことで、記憶をとどめておられたからこそ、詳しい会話になっているのだと思います。また小学校時代の同級生であり、同じ「開拓民」の一員の高橋章さんらの修正を受けましたとのこと、皆さんに、とても大切に残し伝えたい記録の本になっています。

私は敗戦時は3歳。満洲撫順からの引揚時は4歳でした。自分の苦労を子供に語らない人が多いなか、再会した生母が語ってくれた事をいくつか詩にしてきました。けれど満洲で暮らしていた母の女学校時代の同級生の方々の、様々な悲劇はどう伝えたら良いのかと、まだメモは残したままでです。今回驚きと辛さと悲しみにとても揺さぶられ、私も伝える努力をしようと思いました。

（やぎゅう・じゅん：1942年生まれ。父親が満鉄に勤務。1946年秋、葫蘆島より引揚げ。母の語りを作品化するために「満州研究会」に通う。日本現代詩人会、日本詩人クラブ、日本社会文学会、日本文芸家協会 各会員。現在、東京在住）

ダリア

柳生 じゅん子

眼底に
炎のかたちして燃えていたもの
あれは ダリアの花だったのか

旧満州撫順の社宅の庭で割り当てられたひと隅に
若い母はダリアを育てた
朱 赤 黄 えんじ色
幼いわたしたちの背丈ほどで遊び
つまずき よじれていく母の大地に
ひたすら 吹きあげる
大輪の花火であった

トマト 大豆 ジャガイモ 大根 ねぎ
乏しい配給生活を補って耕されていた
青白い畝から
切迫した吐息がからみつき
遠巻きにのぞく その國の人達からも
ときに 無言の苦い矢が放たれていただろう

けれど 夏の朝 扇の内に
蕾をそえ 携えていくと
お仏壇 床の間 机の上
どなたも忘れていた言葉と笑顔が湧いてきて
ひそやかに 胸に抱えられていった

きれいに よく育ったのよ
母は今も 目を細めている
側には 亡き父の 愛しむ視線があったのか
正体が見えないものへの しなやかな反骨よ
わたしの庭に 今 咲いているか

傾き鏗びていく記憶の窓を押し開ければ
ドン と 遅れた音が届く
漂う原野に立ち尽くし
それぞれに 振り向くひとたちがいる

替え歌——「ラバウル小唄」

柳生 じゅん子

旧満洲からの引き揚げ時 葫蘆（ころ）島に辿り着いた時
一番に船に日の丸の旗がついているのを見つけて
父と母や多くの人達が泣いたという
(敗戦後 政府が在外邦人の現地定着方針を決めた為棄民となり
一年以上中国に取り残されていたのだ)

「一さらば大連よ／また来るまではー」
出港すると 甲板で大合唱が始まった
いくつもの集団が 住んでいた地名を挙げて次々と歌い 涙を流した
「一さらば撫順よー」父と母も一緒に声を挙げたという
「知らないというのは恥ずかしく恐いことよ」母は何度も言った
敗戦により生きる地盤が反転し崩壊した
情報も共通認識も少ないまま難民となつたのだ
(小学校は北部から逃避してきた開拓団の人達で溢れた
ソ連軍が南下した時 会社から青酸カリが配られ 退去時に回収された
日本人会が組織され助け合つたが 病弱者は次々と死んだ
冬はマイナス三十度になる地だ
服を剥ぎ取られ凍つて丸太のように道端に転がされていた死体を
春に河原で一ヵ月かかる焼くのを母達は手伝つた
三人の幼児と祖母を抱えての暮し
無蓋貨車に乗り継ぎ 収容所で一ヵ月待機の末の乗船に
安堵と共に湧き上がる想いがあつたのか)

昭和十九年に出た元歌のラバウルはパプアニューギニアの島
当時日本航空隊の基地 大要塞の地名だ
替え歌の地は 僕儡国家満洲の主要都市名だった
けれど軍歌が子ども達にまで大手をふり蔓延していた時代
ロマンスも含んだ歌詞は 戦時中の人々の胸や頭に染み込み
大勢で歌うにはピッタリだったのだ。
見聞きした現地の人達はきっと唾を吐いただろう
船底で寝込んでいた人や多くの孤児達には
鬱陶しく 他人事であつただろう
(四歳の私も水葬を覚えている)
それでも日本の地が見え始めると

人々は船が傾くほど甲板に集まり歎声をあげたのだ
舞鶴港に上陸し 乗った汽車の窓にガラスはなく
人々はそこから出入りしていた

広島の焼け野原から 火の玉が浮遊する様に衝撃を受け
空襲で変わり果てた故郷に戻った
母は 再会後何度も大切な遺産のように語ってくれたが
これは九十六歳で亡くなる半年位前に
涙声で私に初めて聞かせてくれた替え歌だった

ふたつの苗字

今村 寛明

私には苗字がふたつあります。「今村」と「董」^{ドン}というこのふたつです。

「今村」という苗字は私が日本人であることを表す苗字です。日本で生まれて、日本で暮らしている私は当然ながら「今村」と名乗って生活しています。戸籍にも「今村」という苗字で登録されています。しかし、もうひとつの苗字、「董」に関しては滅多に使うことはありません。この苗字は私に中国の血が入っていることを表すからです。

中学、高校を通して、私は日本と中国のハーフであることを友達にあまり打ち明けていません。打ち明けたとしても、それはごくわずかいる心許せる友達にのみでした。その友人には、自らの環境を深くは話していないのです。日本で暮らし、日本語を使っている者が突然、中国の匂いを出すこと。この事に対する、言葉では言い表せない微妙な緊迫感というものを、私は自らの肌を通して感じていたのです。私は度々思ったものです。冗談めかして中国排斥を唱える友人に「僕は中国とのハーフだよ」と言ったら、どんな顔をするのだろうと。この微妙な緊迫感から、私は自らの身体に中国の血が入っていることを隠して生きてきたのです。

母は残留婦人の孫だった

自分が置かれている環境に対して違和感を持ったのは、中学の頃からでした。日本に生まれて、日本で育った母子家庭の私。それなのに、母の実家で飛び交う言葉はほとんど中国語です。正月やお盆などの特別な時間に集まる親戚もまた、中国語を使っていました。そうして彼らはみな、大きく笑い合っていたのです。この強烈なエネルギーに違和感を持った私は母に尋ねました。

「どうして日本にいるのに中国語で喋っているの？」

母は優しく、そして力強く、私にはつきりと言いました。

「私たちは、中国残留孤児の子なんだよ。」

中国残留孤児というのは、第二次世界大戦末期の混乱の中、日本への引き揚げが叶わず、中国に残留せざるを得なかった方々の事を指します。私の曾祖母がその当事者で、私の母はその三代目となります。残留孤児の歴史は、あまりにも劇的です。残留孤児に関わるひとりひとりに、一本の映画が作れるほど濃密で、悲惨なストーリーがあります。私の母も、そして祖母の家に集まる親戚の一人一人も、筆舌に尽くし難いほどの過去がありました。

母たち一家のたくましさ

母は中国東北部、ハルビン市に生まれました。当時の生活は決して裕福なものとは言えませんでしたが、幸運なことに、苦しい経験をした記憶はあまり無いそうです。時折笑顔を見

せながら当時の苦労話を話していました。しかし、小学生の頃、残留邦人の祖母（私にとっては曾祖母）に連れられて日本に来てからというもの、各地を転々としては、日本語も上手に話せず、辛い思いをしたと神妙に語りました。母はぱつりと言いました。私たちには家族しか仲間がいないんだよと。そう語る母の目は、遠くにある故郷を見つめているようでした。そして私は、「今村家」または「董家」にみなぎるエネルギーの源がわかったような気がしました。彼らの活力は、悲惨な経験に裏打ちされていたのです。悲惨な経験は孤独を生み出します。ここにいる親戚達も、私が自らの「董」という苗字の存在を隠したのと同じように、心の奥底に確固として存在する孤独を感じていたのでしょう。その孤独感を互いに分かち合っていたからこそ、互いに笑い合うことが出来たのです。

その事がわかってから、私は中国という国に対して、強烈な憧れを抱くようになりました。私は、中国という未知なる故郷に行ってみたいと思うようになりました。そして中国人としての自分に誇りを持つようになりました。私はハーフとして生まれました。「今村」であるとともに「董」としても生まれました。そのことは実に私の運命だったのです。天は我々に運命という道を用意しますが、その道をどう進むのかは我々の脚にかかっているのです。運命に目を背けてはいけない。中国は私にそう教えてくれている気がしています。

（いまむら・ひろあき：2001年生まれ。現在、学習院大学文学部哲学科二年生であり。小学校の頃から本誌の発送業務を母に連れられて手伝う。母の今村春江は方正友好交流の会創立から活動、現在理事である。本原稿は、PANDA 杯 全日本作文コンクール 2020 の優秀作品。本稿は「人民中国雑誌社」のHPより転載）

国境の街、黒河からの逃避行

中国残留孤児にならなかつたボク

宮岸 清衛

75年前(1946)、8月15日の夜、私は葫芦島港(旧満州)のLSTリバティ船の甲板で父と母の3人で空を眺めて、新京(現長春)で死んだ弟妹3人を流れ星に祈っていた。

76年前の8月9日。国境の街、黒河(アムール河畔、ソ連と国境)を離脱し北安に逃れ、此処で終戦を迎えて、新京で極寒の冬を生きのびた。

白菊小学校？で集団生活をするも、父はソ連参戦時に孫吳の関東軍第123師団に徴集され、敗戦となり、ソ連へ連行途中に脱走した。途中、偶然にも私たち家族と合流した。父は警察官(金沢郵便局電信係から中野無線学校を経て、徴兵により中野電信隊へ、任地満州で現地除隊、熱河作戦の後処理のため、満州国警察官になり暗号無線技士)になった。このため同胞等からソ連軍、国府軍(蒋介石)、共産軍(毛澤東)への密告を恐れて、新京郊外の電車会社の日本人社宅の2階建て官舎の2階に隠れ住んでいた。(社宅の日本人はソ連参戦を機に日本へ脱出)

当時私は(1935年8月12日生)浮浪児もどきをしていた。父や母の居る隠れ家へは3~5日に一度ぐらいしか帰らず、満人、朝鮮人、日本人等5~10人くらいの小孩(シャオハイ、子供)の集団になって飲食店の裏から入り食べ物をかっぱらうやら、商店、屋台に陳列してある饅頭をかっぱらい、皆で分けて食べたり、ビルの空部屋に入り込み、盗んできた獲物を見せ合って、わいわいがやがやと暮らしていた。

一軒目の常習泊は、たしか南湖に近い空きビルで、元銀行の3階の部屋だった。

二軒目は、孟家屯駅(現南長春駅)の南新京寄りの踏切番をしている満人の家だった。

この満人の家には本当によく泊めでもらった。豚を飼っていて、便所は豚小屋と直結しており、大便は直ぐ豚が食べてくれた。

此處の満人は浮浪児を集めて働かせたり、助けたりしていた。私も石炭を持っていき、快く買ってもらい、助けられた日本人孤児の一人だった。

三軒目は猛家屯駅前の鍛冶屋で、此處は良質の石炭掘りの帰りに寄った店だった。

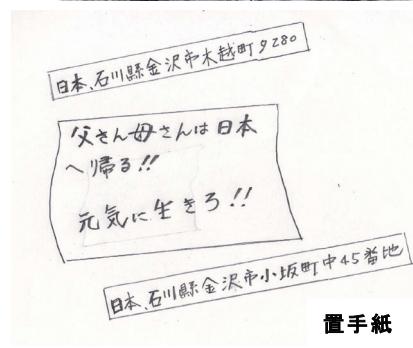
石炭を掘る電柱足場釘に焼き入れをしてもらい石炭掘りの効率が高まつたし、ジャンゲイ(「掌櫃」、親方)には鉄の焼き入れを習った。農作業道具ぐらいなら今でも出来そうな気がする。

ある日、隠れ家に帰ると置き手紙があり、日本へ帰るから、新京駅へ行き日本人に聞いて汽車に乗れとあった。父からは、一人になつたらと日本の住所を書いてある紙切れを何枚も持たされていて、この紙を日本人に見せろ！と常々言い聞かされていたし、屋根裏にはリュックサックに雨具など避難に必要な品物を入れたものを隠してあつた。勿論、日本の住所を書いた紙は何枚も持っていた。

私はリュックサックを背負って新京駅へ走った。新京



ボクこんな浮浪児だったわ！



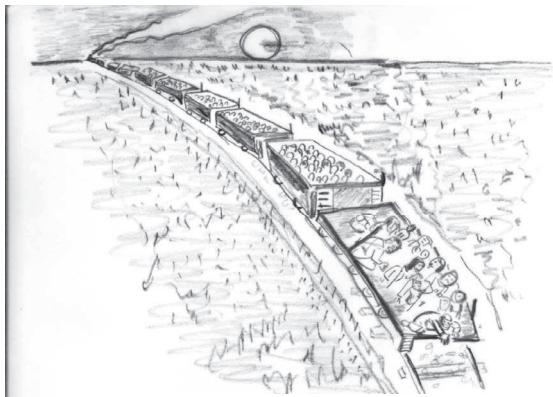
駅の片隅に机が一つ、協和服を着た日本人がいた。私は父が書いてくれた日本の住所を書いた紙を見せた。直ぐ南新京へ行きなさい！と新京駅から線路伝いに南新京へ行きなさいと手を引いて教えてくれた。線路の上を走った。止まっていた貨車の最後尾の無蓋車によじ登った。囲いもない貨車、10人程が真ん中に荷物を置き、振り落とされないように荷物を背によりかかっている人、横になっている人達だった。子供は私一人だった。男の人も女の人も病人のようになつた。横に青白い顔をしていた人もいた。

汽車は直ぐ発車した。ほどなくして止まるところは孟家屯駅だった。しかも私の乗った最後尾の車両は、踏切番の家の直ぐ近くに止まった。

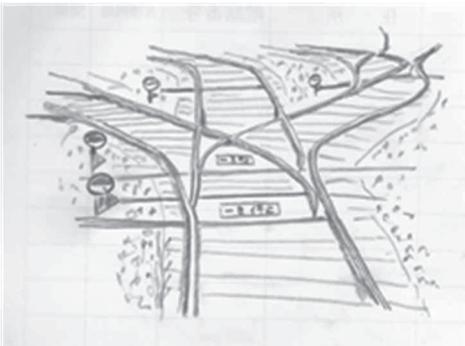
満人の踏切番は、線路切替機を操作していた。私は叫んだ！

気がついてほしかった！！

気がついた満人は走ってきた。私は日本人で、日本へ行くと話したと思う。



後尾のカマボコ板車両に乗った



満人は家から毛布や食べ物を持って来てくれた。なんとも心強いことだった。

手動、線路切替機は人間が直接操作をしていたものです。日本国内では、よほどさびれた廃線したか、それに近い場所しか残っていないでしょう。

夕方になるとシャオハイの仲間達も集まり色々な物等食料は十分になった。
赤い夕日の太陽が沈み、とっぷりと日が暮れてから引き揚げ列車はガッタン、ガッタンとシャオハイ達に見送られながら動き出した。

無蓋車の夜は寒かった、満人から貰った毛布は寒さを防ぐばかりではない。汽車の石炭粉塵や煙や前の車両から飛散してくる小便等を防ぐためにとても役に立った。汽車は途中給水のために何度も止まった。そのとき皆は一齊に下車して用をとした。

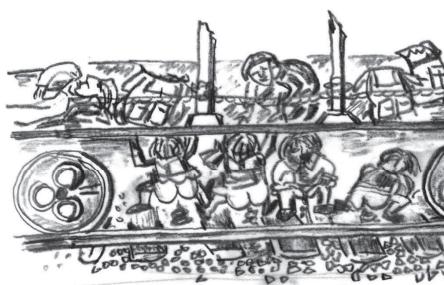
汽車の沿線は糞だらけ、汽車の止まる所は何処も糞だらけ。その中を、食べ物を売る満人が群がっていた。

ボクには十分な食料があり、水は大きなヤカンに十分あった。これも孟家屯の満人に貰ったもの。大陸では飲み水はとても大切なものだったのだ。

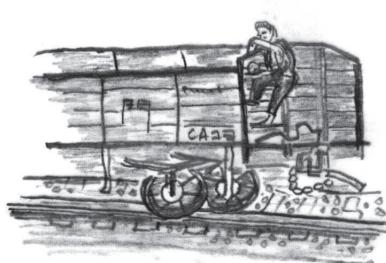
ボクは汽車が止まるたびに、父や母が乗っていないか探した。前の車両へ、前の車両へと移動したが、結局父母はいなかった。

どうう先頭の石炭車にたどり着いた。石炭車は温かいだろうと、一晩石炭車に寝た。

朝になると顔も身体も煤で真っ黒になっていた。



一番良い便所！！



父母を探して、前へ登って、御免、御免とかき分けて進むのに苦労した。

次に汽車が給水のために止まつた時、満人の機関士は大笑いしながら、給水所で私を裸にして洗ってくれた。

服も洗ってくれた、そして、機関室で暖をとらせてもらい、衣服も乾かしてくれた。

有難かった。機関室で暖かい高粱のご飯と炒めたおかずが美味しかった。甘くて菜つ葉が美味しかった。

三晩を過ぎてからか？ 汽車は砂漠のような木のあまりない、平原を走っていた。茶色い山が連なる中で、汽車は止まった。

前方から降りて歩きなさいと伝令が走って来た。
そして何時間も線路沿いに歩かされた。

捨てた毛布も、リュックサックと少しの食料とヤカンの水だけになった。

大きな葦で囲んだ収容所に着いた。遠くに海が見えた、青かった。

大きな変な船が停泊していた。それがLSTリバティ船(アメリカ軍上陸用舟艇)だった。

行列をして、最後の順番だった、黒河に居たことを告げると、男の人が私を連れてアンペラに座っている人々の間を、宮岸さんはいませんか、宮岸さんはいませんかと大きな声で私の手をつないで歩いてくれた。

間もなく父と母が見つかった。感動はどうだったか記憶にはない。

その日すぐ船に乗ったが、父はアメリカの船だ、アメリカ行きだと騒いでいたが、どう納得したかわからぬ。たぶん日本人の船員だったからだろう。

昭和 21 年 8 月 15 日の晩に乗船したことは間違いない。

LSTは鉄船、階段の音が大きく、波が船壁を叩き身体への振動音も響いた。

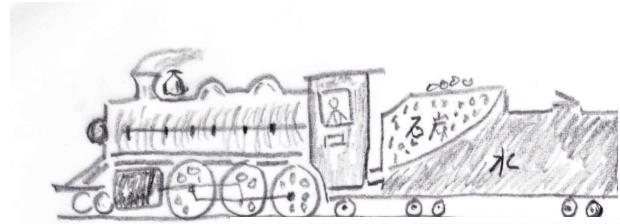
母は 2005(平成 17)年 3 月 17 日に 93 歳の生涯を閉じたが、この話は生涯語らなかった。ボクも語らなかった。

中国残留孤児にならなかつたボクは奇跡的に助かり、親と合流出来たのだ。

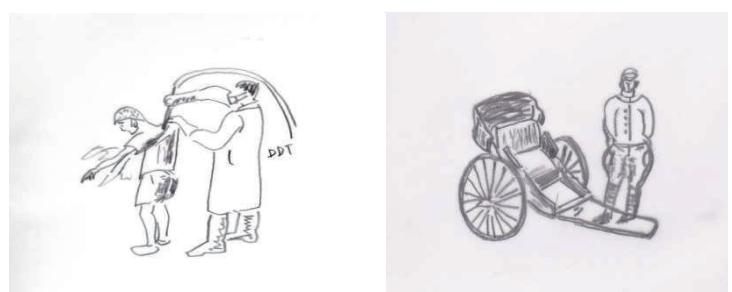
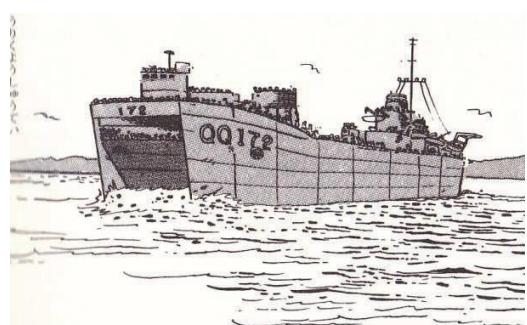
ボクに奇跡は当時 3 回あった、奇跡が起きなかつた子供たちは死亡したか、残留孤児になり、中国人に助けられ、日中国交回復後日本人として帰つた方がが居る一方、中国人と信じて生きている人達がいることを忘れてはならない。

DDTの洗礼を受けて故郷石川県金沢市へと！叔父二人、人力車 2 台が出迎えてくれた。秋の田圃道を走つた！！

(みやぎし・せいえい：1935 年旧滿州生まれ。
1946 年、リバティ船に乗り日本へ帰国。電電公社などに勤務)



石炭庫はテ
ンダー poc
k と呼び、
一段高いの
で見晴らし
がよかったです。



中国残留日本人の孫たちと学んできた「満州」・戦争

飯島 春光

「おい、中国人」

「日本語もできないくせに何で日本にいるんだ」

「日本人をなめるんじゃねえぞ」

「中国人、中国へ帰れ」

2000年4月、長野市篠ノ井西中学校。中国に由来する生徒が大勢いるということ、日本語が不自由な生徒のための日本語指導教室があるということを全く知らずに私は赴任しました。91年に交通事故に遭って5年間の療養生活で社会から隔絶され、さらに生活圏が違ったため、学区内の団地に90年代後半から次々に中国から帰国した人々とその家族が、大勢居住しているということも全く知りませんでした。

学区内の篠ノ井西小学校とともに、日本語指導教室が設置されている（2000年当時、中学校では県下に5校）のに、このようなやり取りがあることに愕然としました。

学校は荒れていました。荒っていた生徒だけでなく、一般的多くの生徒の中にもこのような意識が厳然としてありました。

数年後の3月、卒業直前に、ある女子生徒はこんなことを私に話してくれました。

小学校時代、「中国人いらない」「おまえなぜ日本に来たんだ」と男子にも女子も言われ、たくさんいじめられた。女子にひどいことをたくさん言われ、たたかれたりもした。仕方なくトイレに隠れた。調理実習と一緒にやる人がいなくて、だれもいない教室にひとりでいたり、相談室にいたりした。いじめられたので、反撃にその人たちのシャーペンや鉛筆を取って家に持ち帰ったところ、担任の先生は「泥棒だ」と家庭訪問してきた。

頑張って社会で100点取ったが、みんなに「カンニング」だと言われた。日本語が不由なのに、100点を取れるわけがないと。

親や先生に言ってないことがたくさんある。

彼女は私の担当クラスの子ではなかったのですが、別の教師の社会科の授業の時に体調不良で保健室に行こうとしたところ、いっぱい入れず、となりの社会科研究室で休んでいいなさいと指示され、たまたま空き時間でいた私に、小学校3年で中国から転校して以来の様々なこと、それまで誰にも話してこなかったことを話してくれたのです。

多くの生徒が、多かれ少なかれ、彼女のsuchな体験をしています。そして、ある子は闘い、ある子はがまんして教室にいたのです。

根底にある明治以来のアジア蔑視

このように篠ノ井西中学校には、中国人に助けられ、戦後40年も50年も彼の地で生き

てきた方々と共に来日した孫、ひ孫が大勢在籍していました。今も、中国語を母語とする子どもたちのための「日本語指導教室」がある県下でただ一つの中学校です。私の赴任当時、日本語を全く話せないか、日常会話はできても「学習言語」という、教科書に出てくる言葉が理解できなくて、学業不振に陥っている子どもが大勢いました。そればかりか、日本人生徒たちから、心無い言葉を浴びせられ、その差別に苦しんでいたのです。

私はこのいじめの背景には、明治以来の日本人の中に培われてきた中国人や朝鮮人に対する態度、アジア蔑視の思想が、子どもたちにも投影されていると思いました。また、敗戦後、着の身着のままで引き揚げてきた人々に向かって「満州乞食」という言葉が投げかけられたり、シベリア抑留から復員してきた人々（この中には多くの「満州開拓団」「義勇軍」出身者がいたのですが）が「シベリア帰り」と差別された歴史の事実とオーバーラップしました。さらにそれは、外国人労働者、特にアジアからの「技能実習生」が多くいるようになった2021年の今現在にも通じる問題だと思います。

調査のために旧満州への旅

赴任して、今までの学校にはなかった質のいじめに直面した私は、このいじめは、日本人である彼らのおじいさん、おばあさんがなぜ中国・旧「満州」に行ったのか、そしてどのように助けられ、その後何十年も生きてきたかという、人々の歴史を知ることなしに克服できないと思いました。人々の壮絶な人生と、助けてくれた中国人の存在を知ったら、とてもそんな言葉を吐くことはできないし、また、そんな人間に育てるわけにはいかないとも思いました。そして、一人一人の人生を聞き取り、授業化してきました。

2002年夏休み、研究仲間の教師たちと「満蒙開拓青少年義勇軍の足取りをたどる旅」と銘打って、中国黒竜江省に調査旅行に行きました。校長から、「飯島さん、研修扱いにしてやるで、酒飲み過ぎて問題起こさねようにな」と配慮ある言葉をいただき、「(下戸の) 私に限ってそういうことはありませんから」と、笑って出かけたこの旅行。ハルビン、方正（日本人公墓）、長岡義勇軍開拓団跡、牡丹江、七大河、大八浪（長野県泰阜村開拓団跡）、チャムス、鉄力市（鉄麗義勇軍幹部訓練所跡）、平房（731部隊跡）を視察し、現地住民、黒竜江省社会科学院歴史研究所長・辛培林先生、731部隊罪証記念館・王鵬館長と懇談もしてきました。その成果を職員会で研修報告し、2学期いっぱいかけて学年ぐるみの授業「生き方を考える『日本とアジアの歴史と今』」を開催しました。

そしてその授業は、今に続く平和学習の原点となりました。

過去に目を閉ざすな！

旧西ドイツ大統領のヴァイツゼッカーは、第二次大戦後40周年を記念して行った演説「荒れ野の40年」で次のように述べました。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」。

この演説は、ナチスドイツのおかした過ちを率直に反省したことで世界的に大きな反響を呼びました。氏は、次のようなことも言っています。

「故郷を追われ、隸属に陥った原因是、戦いが終わったところにあるのではありません。戦いが始まったところ、戦いへと通じる暴力支配が開始されたところにこそ原因があるのです。1945年5月8日（ドイツの無条件降伏）と1933年1月30日（ナチ政権の成立）」を切り離すことは許されないのです。」

日本に当てはめれば、満州事変以来日本は何をしてきたのかということを語らずして、またそれ以前に、戦争に向かう政治や社会の体制がどのように作られていったのかということを知らずして、結果としての敗戦を語ることは許されないということになります。

満州移民の問題も同様で、日本軍や日本人が「満州」で何をやったのか、中国に攻め込んだ日本軍が、中国の人々に何をしたのか、ということが、まずははじめに語られるべきであると考えます。そしてあの敗戦の混乱の中で、大本営や日本軍がどういう行動をとったのか、一般の民衆、特に開拓団の人々がどういう状況に置かれたのか、また、どのような状況で子どもや女性たちが中国人に預けられ、または助けられたか、その人々が戦後数十年、中国の地でどう生きてきたのか、それに対して日本政府はどのようなことをしてきたのか、してこなかったのか、一方、引揚げて来た人々は、戦後どう生きてきたのか。

このようなことが、特に「満州移民」にかかわって、今を生きる私たちが学ばなければならないことであると考えます。

かく言う私は1977年に木曽郡の木祖村で教員人生をスタートし、81年3月まで奉職しました。当時のPTA会長さん、村の教育長さん、教育委員長さんをはじめ、保護者、村委会員さん、地域の方々の多くが、木祖村、日義村、奈川村から成る第二木曽郷宝泉開拓団、500人余りの開拓団の半数が亡くなったこの開拓団の引き揚げ者でした。皆さんと親しく交わり、お世話になりながら、まだ「中国残留日本人孤児」の肉親捜しが始まる前で、未熟な私はこの問題を授業化することができませんでした。本格的に「満州移民」の問題に正面から向き合って授業化してきたのは、2000年に篠ノ井西中学校に赴任してからでした。

元開拓団員から話を聞く

2002年2学期、学年ぐるみの総合的学習で、日本とアジア（特に中国）の戦争の歴史を扱い、学区の出身である越川金子さんに来ていただいて、お話を聞きました。金子さんは家族で黒台信濃村開拓団に加わり、骨と皮ばかりになって瀋陽の収容所にいたところを中国人に助けられ、34年後の昭和54年9月に永住帰国された方です。学習の最後、12月に金子さんのお話を聞いたのですが、その前日には中国残留孤児国家賠償請求訴訟が提訴された日でした。

生徒たちは、「こんなことがあったのを初めて知った」「今までひどいことを言って申し訳なかった」・・・と授業後に感想を書き、劇的に意識が変わっていきました。ある女生徒は塾で、別の中学校の生徒に授業の様子を語った時に、「そんなのテストに出ないよ」と言われ、「私たちはテストで点を取るためにこの学習をしてきたのではない。人間として忘れ

てはならない大事な学習をしてきたのだ」と言いました。私は担任からこの話を聞いたとき、「あのおとなしい子が」と、体が震えるような感動と感謝の心を抱きました。

しかし、当事者のN子は、この問題に正面から取り組んだ私に敬意を表しながらも、厳しい言葉を投げかけてきました。

「先生、良い感想書いてきたって、変わらないよ」

「ウチら分かっているんだ。『中国人』って言われて、どれだけ辛い思いをしているか、普通の日本人に分かるわけがない。いつも言われてるんだから。そのときだけ勉強して分かったような感想書かれてもだめだよ」。

彼女のこのことばにどう応えるか。これが私に課せられた命題でした。

一般論として「満州移民」の歴史（教科書にはほんの数行しか書かれていない）を教えるだけでなく、目の前にいる生徒のおじいさんやおばあさんがどのような経過で中国に残ったのかという、具体的な事実を抜きに授業は展開できないと考えました。

生徒たちは級友のA君やBさんが中国とつながっていることは知っているわけですが、そのおじいさんやおばあさんがどのように助けられたのかは知らないわけです。そのことは、当事者の生徒でも、さらにその親でも、詳しくは語られていないのです。

だとすれば、ひとりひとりの人生を克明に追いかながら、授業の中で共有させていただくことで初めて、本当の授業になると想え、授業を担当している生徒の祖父母や曾祖母を訪ね、聞き取りを始めました。聞き取りの際には当事者生徒だけでなく、その弟妹も同席させました。

その上で授業を展開しました。

満州事変の授業のあと1時間、「君は満州へ行くか」

敗戦の授業のあと1時間「満州へ行った人はどうなったか」

この授業をできれば親にも見てほしいと、進度を調整し、参観日に授業をしたことありました。

3年生の最後の参観日に、特別授業として扱ったときもありました。

子どもたちの発表

また、夏休み課題として課している「社会科新聞」のテーマを3年生は「戦争と平和」とし、家族の戦争体験を聞き取らせてきました。当然のことながら、中国に由来する生徒には、祖父母や曾祖母の体験を新聞にまとめさせました。

全学級の授業を担当することはできませんが（学年6学級）、冒頭で触れた女子生徒のように、当事者生徒に直接かかわって、新聞づくりを援助することはできます。その積み重ねの中で、社会科で一致して授業をする取り組みを経て（これだけでは教科担任と生徒の授業でしかないので）、学年ぐるみの総合的学習へと発展させ、私の授業を、学級担任を含む学年の教師全員がともに受けるという態勢をつくってきました。

文化祭には、総合的学習の発表として全校生徒、保護者、地域の皆さんに発表してきました。毎年、3学年各クラスの代表が、家族の戦争体験を中心に発表。中国に由来する生徒は、ある者は司会をし、ある者は自分の祖父母や曾祖母の体験を発表してきました。

以下に、①文化祭でのT男の発表、②英語弁論に挑戦し、司会をしながら発表したK男の原文と、③成人式に代表として発表したY男の意見文を掲載します。ともに新聞でも記事となり、信濃毎日新聞は社説に取り上げました。

私自身は2015年、「ひいばあちゃんは中国にお墓をつくった」として出版。長野県同和教育研究協議会での発表や、NHKラジオ深夜便・明日への言葉【2017年11月16日】に放送など、発表の場をいただいてきました。

① 中国で助けられた祖母

僕のおばちゃんは今80過ぎですが、とても元気に暮らしています。そんなおばあちゃんが、とても苦しかったときがありました。

おばあちゃんは14歳の時、家が貧しかったので、「私が満州へ行けば、親がいっぱい食べられる」と、満州開拓団・上高井郷の奉仕隊の一員として、満州へ行きました。14歳のおばあちゃんだけでは心配だと、姉も一緒に行きました。夏の間だけの約束で4月に行つたのですが、その年の8月9日にソ連軍が攻めてきて、おばあちゃんたちは帰れなくなってしまいました。

おばあちゃんたちは必死に逃げました。日本軍は先に逃げてしまって助けてくれず、空を飛ぶのはソ連軍の戦闘機ばかりでした。馬の足跡にたまたま雨水を飲んだり、朝は、葉っぱにたまたま露を布に浸して吸ったりしました。食べるものはなく、中国人の畑のトウモロコシやジャガイモを盗んで、生でかじって食べたりしながら逃げたそうです。

逃げてから9日目の朝、ある部落の近くで中国人から銃撃を受けて、散り散りになり、みんなとはぐれてしまいました。おばあちゃんを含めて4人が中国人に捕まってしまいました。

中国人たちは鎌やなたのようなものを持って、口々に「殺しちゃえ、裸にして殺しちゃえばいい」と言いました。その時に、76歳になるヤンさんというおじいさんが、助けてくれました。

ヤンさんは「この人たちを殺してはいけない。この人たちを殺すなら、このわしを殺せ。もう年だから命は惜しくない」と言って、おばあちゃんたちを自分の家に連れて行ってくれました。

4人のうち3人は、中国人のお嫁さんになって、命を助けられました。僕のおばあちゃんはまだ14歳で、若くて体も小さかったので、ヤンさんの家にいましたが、ソ連兵が毎日やってくるので、ヤンさんは自分の息子と結婚するように言い、おばあちゃんは15歳になつたばかりの時に結婚しました。

おばあちゃんは11人の子を産み、農業をして暮らしていました。ヤンさんも、僕のおじいちゃんになるヤンさんの息子も優しく、一度も暴力をふるわれることも、怒られたりすることもなく、大事にしてもらいました。「おまえはだれも知っている人がいない。親もそばにいない。だからけんかもしない」と言われたそうです。

このできごとは、僕が小さいころから聞かされて、おばあちゃんはとても大変だったんだなと、悲しい気持ちで聞いていました。もしおばあちゃんがヤンさんに助けられなかつたら、母はいなく、僕もいません。そんな奇跡のようなことがあったからこそ、母がいて、母に産んでもらった今の自分がいるわけですから、今、この日本で住んでいること、生きていることを大事にしたいです。

おばあちゃんはその後、40年間も中国にいました。おじいちゃんが亡くなり、1985年に日本に来て、群馬県の温泉で働きました。一月15万円もらい、それをためては子どもたちに送っていました。3人が病気で亡くなり、残った8人の中に僕の母もいました。8人の子をまず日本に呼び寄せ、次にその家族合計40人以上をおばあちゃんが日本に呼び寄せてくれました。

僕の母が日本に来たのは1994年です。その時は既に結婚していて、母は日本で働くために、僕の父と姉を中国に置いて来ました。最初は言葉が何もわからず、仕事もできなかつたのですが、おばあちゃんが何度も頭を下げてお願いしたそうです。そのお陰で、母も群馬県の温泉で働くことができて、8ヶ月間そこで働きました。お金も少し貯まつたので、その後は中国にいる父と姉を呼び寄せ、長野に住んで、しっかり生活できるようになりました。母に、何が一番大変だったかと聞くと、仕事が大変ではなく、一番は、言葉が分からぬことだったと言っていました。

おばあちゃんは僕に、「平和に暮らしてほしい。戦争は絶対にしてはいけない」と言っていました。

僕のおばあちゃんのように、中国人に助けられた人が大勢いるということを知ってほしいです。そしてこれからも、日本と中国が仲良くしていくことを望んでいます。

② 2016年 中学生英語弁論 「満州国と僕」

僕は日本語を話します。両親は僕に日本語で話しかけます。でも親同士は中国語を話します。なぜだかわかりますか。

ではお話ししましょう。僕は小学4年生の時、家族で中国に行きました。滞在の間時間がありすぎたので、現地の小学校に通うことになりました。ある日クラスメイトが数人僕に向かって「日本人め、おまえは鬼の子だ」と言ってきました。ショックを受け、けんかもしました。何回もありました。日本に帰国後、同じようなことが何度も起きたのです。日本ではというと、クラスメイト数人が「中国人！」と言うのです。「なんで僕がこんな目に遭わなければならないんだろう」と思いました。僕はその時、中国人の血が流れていることがいやでした。自分自身と両親を恨みました。こんな気持ちが長い間続きました。

しかし昨年、気持ちに変化がきました。社会科の先生が僕の一家の背景を知っていて、僕に、家族の歴史について祖父に尋ねるよう言ってきました。早速祖父に聞いてみると、祖父の顔が急に真剣になり、話してくれて、僕の家族にはとても深い歴史的背景があるのだということを理解しました。

満州国のことを知っていますか？

戦時中、日本は中国の土地を買い上げるなどして手に入れ、20万人以上の人々を送り込みました。曾祖母がそのうちの一人だったと聞いて、僕は衝撃を受けました。曾祖母は1939年に飯山から家族とともに満州に移りました。彼女の夫は日本の軍隊に召集されて戦死したそうで、3人の子どもを一人で育てなければなりませんでした。とても大変な生活を送ったそうです。終戦後の1945年8月29日、何千という中国人が、満州の曾祖母の村を襲撃しました。彼女は逃げました。まもなく収容所に身を寄せ、そこで暮らすことになりました。曾祖母は料理の担当で、米を炊いたとき、うまく炊けた部分を他の家族に回し、焦げた部分を子供たちに分け与えていたそうです。その後、子どもたちのより良い生活を切望して、仕方なく2人の子供を中国の方に引き渡し育ててもらいました。真ん中の子どもも引き渡そうとしたときは、その子が離れたがりませんでした。実際、曾祖母は何回も自決を考えたようですが、その子のために生きていくことにしました。ついに曾祖母は現地の中国の方と結婚をしました。それが僕の曾祖父です。2人は3人の子どもをもうけました。それでも、日本に戻ってくることを何度も何度も考えましたが、結局かなわず、満州で亡くなりました。

この話を聞いたとき、僕は悲しい気持ちになったと同時に、曾祖母を誇らしく思いました。彼女はとても苦しい生活をしていたけれども他人に対してはとても親切だったからです。もしそのような生活や中国の方との結婚がなければ、僕は今日ここに存在していなかつたでしょう。それに、歴史という物がとても重要であることもわかりました。太平洋戦争や広島、長崎の原子爆弾投下のことを知っていても、曾祖母のように満州で暮らした日本人のことを知っている人は多くありません。それが、僕がここで話している理由なのです。この歴史を忘れてほしくありません。中国の歴史的背景のある人々に、悪いイメージを持ってほしくありません。僕と同じような経験はしてほしくないですし、自分自身がいたい誰なのかを恥じることもしてほしくありません。

さて、僕の最初の質問を覚えていますか。なぜ僕の両親がお互いに中国語を話すのかを。もうわかりましたね。僕は将来僕の子どもたちに家族の歴史をきちんと話し、日本と中国の架け橋になりたいと思います。

③ 2018年 成人式意見発表

本日は、成人を迎えた私たちの門出にこのような式を開催していただき心より感謝申し上げます。

今は一八歳選挙権となりましたが、二十歳を迎えたことによってさらに、政治や経済など世の中に主体的に関わっていかなくてはならないと感じています。

成人に当たり私は、私が今ここに立っているのは奇跡とも言うべき、私の命につながる

祖父の人生について、ここで語らせていただきます。

私の祖父は八歳で、満州開拓団の一員として家族と一緒に中国東北地方に渡り暮らしていました。しかし、日本は戦争で敗れ、それを知らされることがなかった開拓団の人々は、ただひたすら逃げ続ける日々を送っていました。日本軍は先に逃げてしまい、ソ連軍の一斉攻撃を受けることを知った開拓団の人々は話し合いの末、攻撃される前に集団自決をすることになりました。しかしだだ一人それに反対していた人がいました。私の曾祖父・下田讚治でした。集団自決の日、幼い子供は井戸に投げ込まれ、大人は銃で撃たれ次々に亡くなっていました。その様子を、お経を唱えることができるという理由で、最後の見届け役として見ていたのが、皮肉にも唯ひとり反対していた曾祖父でした。私の祖父はこのとき一四歳。「俺は生きたい」と曾祖父に言い、集団自決の前に、朝早くその場から逃げました。もう九月になり、霜が降りる寒さの中、裸足で必死に逃げ、親切な中国人の方に保護してもらい、祖父はその村でただ一人の日本人として五〇年間暮らしてきました。

そして、日本人として恥ずかしくないようにと一生懸命に働き、職場で働きぶりが優秀な人である「労働模範」に選ばれ、さらには長野県の五倍もの人口がいる黒竜江省の「労働模範」にも選ばれました。そして男三人、女三人の子宝に恵まれ私の母が生まれ、日本に帰国してきました。

私は祖父、曾祖父共に誇りに思っています。祖父が生きて逃げるという選択をしていなければ、私はここで皆様に祖父、曾祖父の生き様を語ることができず、成人を迎えたこの姿を両親に見せることもできなかつたのですから。

祖父は六年前、八〇歳で亡くなりました。生前「戦争ってのは人を殺すことだ。国と国との人殺しだ。だから、二度と再び戦争はおこしちゃいけねえ。戦争はこの世で一番悪いことだ」「戦争で犠牲になるのは弱いもんだ。戦争は絶対いけねえな」と語っていました。

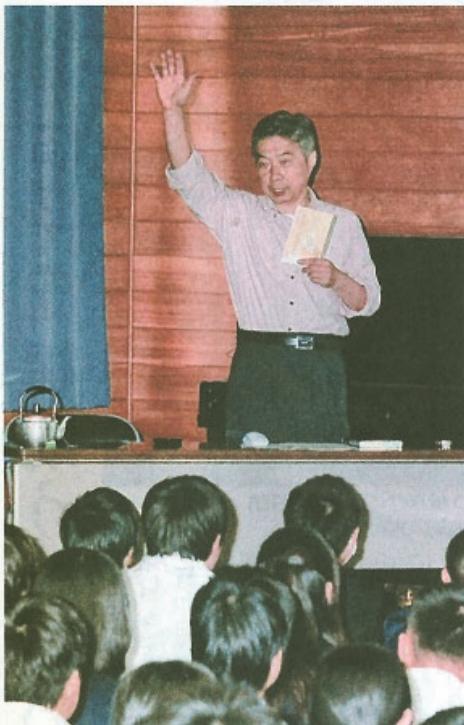
私は今、大学で観光ホスピタリティについて学んでいます。そしてそれを生かした職業に就きたいと思っています。それは、日本や世界が平和でこそ成り立ち、発展する仕事です。祖父が言っていたように、世界の国々と仲良く、戦争のない日本を作っていくために、私たちもしっかりと考えて生きていきたいと思います。そのためには、与えられた選挙権をどう使うかということもとても大事になってくると思います。常に世の中を見つめ、より良い社会をつくるために、責任ある行動をしていきたいと思います。

本日はまことにありがとうございました。

(いいじま・はるみつ：1953 年生まれ。長野県の現、千曲市に生まれる。長野県の小中学校に 42 年間勤務。著書に『ひいばあちゃんは中国にお墓をつくった 中国残留日本人の孫たちと学ぶ満州・戦争』(かもがわ出版) 他)

「満蒙開拓」身近に考える

飯島教諭の平和授業 最後の年



満蒙開拓の歴史などについて学ぶ授業で生徒たちに問い合わせる飯島教諭=11日、長野市篠ノ井西中

長野市篠ノ井西中学校で11日、満蒙開拓の歴史から和平が中心となって2002年度に始めた取り組みで、本年度末に退職を控えた飯島教諭にとっては最後の年。同校には戦前・戦中に旧満州（現中国東北部）に渡り敗戦で残留孤児・婦人となつた人の子孫も通っており、3年生250人が中国残留邦人生んだ歴史について考え始めた。

総合学習の一環。飯島教諭の言葉は、故郷の信州に帰国は、旧満州で1945（昭和20）年8月の敗戦後も多く的人が犠牲になつたことを説明し、「何があつたのか」と問題提起。「本校には中国どながる生徒が多いのはなぜか」と投げ掛けた。飯島教諭（15）は「中国語を話す生徒が

授業後、1組の宮田樹さん（15）は「中国語を話す生徒が篠ノ井西中学校の平和学習は、飯島春光教諭が同校に赴任して中国からの帰国生徒と出会つたのがきっかけで、そのルーツとなつた歴史を理解し、仲間と共にすることの大切さを伝えてきた。来年度以降も、共感した教員らの手で引き継がれる見通しだ。

満蒙開拓の歴史などについて学ぶ授業で生徒たちに問い合わせる飯島教諭=11日、長野市篠ノ井西中
婦人などを生んだ。飯島教諭は、問題の根底にあった移民政策。1936（昭和11）年に国策となつた農村の次男、三男を中心に二十町歩（約20ha）の地主になれた。生徒の祖父母らに話を

満蒙開拓 昭和恐慌後の農村の人減らや、事実上支配していた「満州國」（現中国東北部）の辺境警備を目的とした移民政策。1936（昭和11）年に国策となつた農村などの宣伝文句で勧誘が行われた。敗戦までに全国で約27万人が満州に渡つたとされ、長野県は全国最多の約3万3000人を送り出した。敗戦時の混乱で大勢が死亡し、残留孤児、残

残留孤児子孫も通う長野・篠ノ井西中

いることを今まであまり深く考えてなかつたけど、興味が湧いた」。飯島教諭は「中国とのつながりを持つ仲間を系団に、戦争の歴史を身近に考えてほしい」と話した。

今後の授業では、残留婦人を祖母に持つ卒業生の富江辰吉さん（34）＝長野市＝と飯島教諭が対談するほか、生徒が吉さん（34）＝長野市＝と飯島教諭が対談するほか、生徒が同じような状況に置かれたら満州に行くかどうかを考えた。

仲間のルーツ 尊重願つて

「目の前で苦しむ生徒に、何らフォローできなかつた」。飯島教諭は2000年の赴任時、帰国生徒がいじめの対象になつたり非行に走つたりを吐くことになる」と受け止め、「そんな日本人に育てるわけにはいかない。帰国生徒も、そのルーツに誇りを持つてほしい」と願つた。

3年生の担任教員の間には、聞き、授業に取り入れた。いじめは「残留者の人生につばず、子どもたちが同校に通つていることを踏まえたもの」だ。

篠ノ井西中学校の平和学習は、飯島春光教諭が同校に赴任して中国からの帰国生徒と出会つたのがきっかけで、そのルーツとなつた歴史を理解し、仲間と共にすることの大切さを伝えてきた。来年度以降も、共感した教員らの手で引き継がれる見通しだ。

邦人とその家族が移り住む例が増え、学校でも残留邦人の孫やひ孫ら、中国語を話す生徒たちが自立し始めた。飯島教諭は、問題の根底に降も絶対残していかないといふ無理解があると考え、自身も学びながら生徒と向き合つた。生徒の祖父母らに話を

（井口 賢太）

2017.5.12 信濃毎日新聞

今、振り返ってみると

大島 満吉

中国に行くと大きな都市には必ずと言ってよいほど戦争（解放）記念館がある。私は長春・瀋陽・ウランホトでの印象が特に強い。ウランホトとは「烏蘭浩特」と書き、内蒙古自治区にある元興安街のことだ。戦争（解放）記念館とは、後世の人々に「忘れまい」と一つの教育基地として全国展開している施設だ。よって、中国国民は何らかの形で戦争を追体験し、勉強している。

日本はどうだろうか。広島の原爆ドームとか鹿児島の知覧こそ見どころはあるが、沖縄を含めて他にこれといった見応えのある戦争体験を伝える記念館はそれほど多くない。

どうしてだろうか。本当のことを教えたたくない。日本の正義を主張したい。天皇制を傷つけたくない。こうした理由が根底にあるため、日本は本当の民主制になりきれていないのが実情なのではないだろうか。

開拓団の送出と被害

満州国「建国」の昭和七年、最初の開拓団は「試験移民」として武装して満州に入った。

昭和十一年、広田内閣が二十年間に百万戸の移民計画を発表した。それから本格的な開拓団が組織されて満州へと向かった。ピークは昭和十七年から十九年だが、十三年間で義勇軍を含めて開拓団は合計約27万人が満州へ渡り、そのうち7万人が帰らぬ人となった。

開拓団員を一番多く出したのは長野県で、三万人を超える人々が海を渡った。大きな被害を出したので、送り出した学校の先生達は一番苦しんでいただろうと思う。國の方策として打ち出されたからには、協力するのが当たり前であろう。当時、教育に一番熱心なのは長野県であった。

国家が発表している百万戸送出計画に沿っているのである。事実、その頃日本中が貧困に喘いでいた。どうにかして活路を見いだすべく施策を出すのが政治家の役目である。

壮大な計画に誰か反対したのだろうか。民間も軍部も、マスコミも誰も反対していた形跡はない。当時はとても反対できるような空気ではなかったようだ。反対どころか、これこそ日本の生きる道と、全員が賛同したと言っても良いのかも知れない。

開拓団をよその国に入れさせた事がそもそも問題だ。土地を取り上げたに近い状態で買い取った事も悪い。使用した現地人に対する待遇にも問題があった。関東軍が先に撤退したから被害を大きくした。団長の判断に誤りがあった。結果論として色々な反省材料を沢山残したのが開拓団問題だった。

ではどうすれば良かったのか。日ソ戦争はもともと予想していたのに何も手が打てなかった。働き手である男子を根こそぎ動員で軍が召集する事態は想ていなかつた。もともとは召集免除により、生産に邁進させる筈だったのに反故にされた。

産めよ、殖やせよという政策も結果として被害を大きくした。満州での生活は概ね良かった。計画どおりに進行していた。それを暗転させたのは勿論戦争である。

戦争が起きることも前提にして開拓団を送っていたことは後日知ることになるのだが、戦争になつたら日本に居ても何処に居ても安楽な場所は無い。その意味では、戦争さえなければこんな悲劇は起きなかつたのである。被害は開拓団だけではない。その反省は成されたのだろうか。今の政治家に本気で平和を追求する姿勢を感じられないのは不幸である。

台湾と米国の統治

台湾は親目的であるという。台湾は日本に五十年間統治されていた。その頃は日本になつていたのだ。朝鮮も日本統治下だった時が三十五年間ある。しかしこちらは親目的だと誰も云わない。その差は何なのだろう。

両方とも日本が武力で奪取したのではない。台湾は日清戦争の結果清国（現・中国）から割譲されたものである。

朝鮮は昔から日本、中国、ロシア、そのほか常に圧力をかけられて、自立が難しく何処かと組む事が生きる道と王様が決断して日本との合併を決めた。同じ日本になつたのに朝鮮は反日で台湾は親日になった。何故だろうか。

台湾は後藤新平の政治が尊敬されている。道路を造り、ダムを造った。伝染病退治や衛生に貢献があった。学校を造った。お茶づくりや砂糖づくりが進んだ。この様な事が評価されて今に残ったのである。

朝鮮の場合は街づくりや工場の近代化など大きな成長があつたにも関わらず、反日になつた。それは何故だろうか。

はっきり言えるのは差別があつたからである。給料、待遇、処遇、配給、住む町、日本人なら無条件、朝鮮人なら七掛けとか八掛けにして、日本に都合のよい時だけ君たちは日本人、都合の悪い時は朝鮮人、と区別した。こんな差別の体験が怨念になっている。感謝されるのと怨念はこんな違いになるのが人間社会だ。

一方の米国と日本はどうだったか。

原爆を落とし、沖縄をめちゃくちゃにした。東京だけでなく主要都市はことごとく焼かれてしまった。その米国に対して日本人はどの様に米国を思っているだろうか。恨んではいないのだ。

日本が悪かったとして米国を受け入れている。米国はD D T供給・日本人の帰還支援・民主主義の導入・財閥解体・食料の支援、天皇制の存続、衣料品・薬品の支援・戦犯の裁判、こうした事を日本人が受け入れて納得しているからではないだろうか。

現在の米軍基地は日本を占領した時の継続である。占領時代と変わらないのだ。日米安保が日本の安全に寄与しているからと納得しているのだ。要は相手国に対して良くしているのだ。日本を尊重して独立を支持した。差別していないのだ。恨むべき相手の筈だが両国の信頼は厚い。憎むより感謝のことが多いのだ。

父・肇は言っていた。「人にはよくしておくものだ」と。他人に良くしておく。これは愛であろう。助ける事、米国は日本を助けたのだと思う。

五族協和を何故できなかつたのか

日本は満州国の建国に際し、五族協和と玉道樂土を旗印にした。満州国創立のために渡った官吏は皆この五族協和を目指していた。それが実現できなかつたのは軍部の強圧政治だった。私の住んだ興安省の場合は、モンゴル人が34%で一番多かつた。満州族は29%、漢人は11%、朝鮮人、日本人その他で26%位だつた。

モンゴル行政に力を入れたのが時の特務機関長金川大佐だつた。県の制度と似ているが旗というモンゴル行政を敷いていた。興安軍もそうだが、軍官学校も興安学院もモンゴル族が中心だつた。ジンギスカン廟も出来た。ラマ寺も優遇した。

この様な事もあって金川大佐は尊敬されていた。バクシーと呼ばれていたのだ。

葛根廟事件から生きのびて興安に戻った佐藤百合枝さんの手記にはモンゴル兵の恩返しが載つてゐる。残留孤児となった坂井幸子さんもモンゴル兵に助け出された。

後年に有名になつた残留孤児烏雲（ウ Yun・日本名立花珠美）さんも養父はモンゴル人だつた。

生き残つた人も何らかの形で地元の人の助けがあつた。棒を持って追う人と、助けてくれた人との違いは何だつたのだろうか。一つは時の経過である。戦勝の一週間は地元民達が互いに喜んで気勢を上げたが、落ち着きを取り戻すと倒れる人を見過ごせなかつた。戦勝を境に地元民は日本人に味方する事は不利になるのが分かっていたから棒を持って追い払う事で身の証を立てた。日本人を敵対視していない人も地元民として棒を持つた。

ソ連に味方するか、共産党軍に味方するか、國府軍に味方するか、モンゴル族の独立に旗を振るか、どちらにしても日本との決別は絶対に必要だつた。だからその一週間は救いたくても手を出せなかつた。

当時森繁久彌さんは新京の放送局でアナウンサーをやつていた。蒋介石総統が「今こそ日本人を保護せよ」と号令を掛けたことを森繁全集第4巻の中に書いてゐる。

中国人は何千年と戦禍の中を生き抜いて來た。日本人より剛胆だし、したたかな所がある。五族協和が本当に出来ていたら、満州国全体が日本に味方しただろう。開拓団の土地も強奪するような態度ではなく、数年にわたり優遇する方法を考えるべきだつたと思う。

日本人だけが優秀だと為政者が錯覚していたのだ。軍は強権で抑え込めると思ったのであろう。人にはよくしておくものだ。日本の政治が本当に五族協和なら今でも満州国は存続していた筈である。日本が経済成長の先端を担う事が出来たのは米国の統治が良かったからだと断定して良い。

日本の防衛費

7年続けて防衛費が増えている。5兆3千7百億円が2021年の予算である。カネ遣いは政府にお任せで国民は何も云わない。マスコミもつつくと損になるのか批判的な事は書かない。警察が不要な国は無いが、軍隊を持たない国は現在20カ国を超えてるそうだ。小さい国ほど軍事費がいらないらしい。

敗戦のどん底から立ち上がり、日本が経済大国として世界に肩を並べられたのは、戦争をしなかつたからだ。

その日本は世界の一流国として軍備を持ちたいらしい。戦闘機がどうの、イージス・アショアがどうの、敵の発射基地を狙うべき装置がどうのと言い出している。戦闘機は誰を撃つためか140機もある。航空母艦も買い増した。オスプレイも配備している。ミサイル基地を攻撃する武器を開発したいそうだ。

右手に花束、左手にピストルで外交をしたいらしい。平和ボケしている日本の若者は余所事のように過ごしているが、戦争になったら君たちが戦場に行くのだよ。法律が出来たらもう逆らえないのだよ。幸徳秋水も、小林多喜二も反対したら刑死させられた。

平和外交に一千億円を使えば十回も二十回も使えるおカネがあるのに拉致被害者一人救えない日本国ってどうかしていると思わないかい。北方領土も還って来ないよ。防衛費というのは切りが無いものだ。どこまで行っても青天井で際限がない。最後は戦争するしか無くなるのだよ。

色々装備して敵を増やすしか無くなるのだ。他国のお手伝いをする事になるだろう。大国は全部無駄遣いしているのだ。国連中心に戦争をしないと知恵を出し合えば平和を造り出せる筈だ。自国第一ではなく、地球の人類のためと考えよう。そんな哲学を持つ政治家が日本から出て欲しい。

世界の防衛費を合わせて地球の温暖化を防ぐ為とか自然保護とか、ゴミの処分とか考えるべき時代に入っているのだ。軍事産業は恥だと思える世の中に出来ないものだろうか。

ノーベルさんは造ったダイナマイトが軍事に使われるの目的に無かった。申し訳ないとノーベル賞を造って平和貢献する事にした。日本が一番先に核兵器不使用を訴える立場なのにその条約を回避している。情けない。信念のある政治家が居ない。自民党を支持する限り新しい政治家は出て来ない。自民党議員を落選させる運動が起きないと日本は変えられない。自民党を割ってでも平和追求する政治家の出現が望まれる。毎年防衛費を5%減らして平和貢献に使いなさい。若者よ、君たちの時代に戦争が起きるぞ。マスコミよ、危険信号を感じたら積極的に報道しなさい！

武力で奪ったクリミヤ半島

もう五年も前になるだろうか。プーチンさんの率いるロシアがウクライナのクリミヤ半島を武力で奪取した。ロシア側の言い分は、もともとがロシアの領土でロシア人が多数住んでいる場所なので問題は無いと表明している。

武力で現状を変更するのは国際法で許されないと世界の大半が声を上げ、ロシアに対して制裁を課す事になった。ロシアは本土から半島に橋を懸けてロシアとの地続きとなつた。

さて、この問題はどうするべきだろうか。ウクライナが許されない行為だと主張するのは当然であろう。ソ連が崩壊したあとはウクライナに所属して二十数年になる今日、ロシアが武力で奪ったのだと世界に訴えている。これからどうなるか考えてみたい。

これは日本が満州国を作り上げた時と非常に似ている。

ここでは現地人がどのように受け止めているかによって最終的には決まる問題だと思うのだ。住民の支持がどちらにあるのか。

ロシア人が過半数を占めているかどうかではない。イギリスがEUを脱会する時の国民投票と同じく住民の意思がロシアに支持があるなら他国がとやかく言ってもしょうがない。住む人の80%が支持するなら尊重するしかないだろう。

嘗て中国で文化大革命があった。この時の文化人や地主や高級官吏とかインテリは大変な目に遭った。こんな混乱があるなら、日本の統治時代の方が良かったと思う人もいたであろう。こんな時に他国からの侵略があったら中国はひとたまりもなかったと思う。

このような混乱を起こさせないようにしたのが、今度の香港問題だと思う。

香港は五十年間一国二制度を実施する筈だった。自由を主張する余り基幹である中国の方針に従わず暴力問題に発展させてしまった。自ら自由を潰してしまった。節度を超えては暴民と扱われてしまう。統治側は見過ごしてはおけなくなった。

新疆ウイグル問題やチベット問題でも住民の意思を尊重しなければならない。

納得のいく施政ならば住民の支持は得られる。強権だけでは日本が満州で失敗したように中国政府も混乱するだろう。国民の為の政治がどこまで出来るかがカギになる。

日本の開拓団問題は国内の人減らしでもあった。抑留問題は人力を他国に提供して国内の負担を軽減する処置だった。拉致問題は口先だけで本気で解決に走っていない。

特攻の制度も命を無駄にした。この日本が変われるかどうかは国民の一人一人にかかるている。

残留孤児と養父母のこと

葛根廟事件の現場から救われた小学生以下の子供たちが32名もいたことが判明している。四十年も経った後のことでの、氏名の確認出来た残留孤児たちだ。

その間に病死したり、他地区に行って不明になったり、日本人の子と公表しない場合や売買された子供もいたと思う。合わせたら五十人位が救出された可能性もある。

現地の人は敵国の子供という感覚は無かった。満州国と日本が戦ったからではないからだ。ソ連軍の侵略で日本人の子が路頭に迷っている。助けを求めている。放っておけば死んでしまう。そこで自然に手を貸し、養育するまでに至ったのだと思う。

敵国の子供なら追い払うか殺害するであろう。当時の日本人なら敵国の子に容赦する事は無かつただろう。大陸の人は人道的に手を出したのだ。

二〇一〇年、私達は養父母に感謝の碑を建立したいと、身元が判明せず中国に残った陳秀英さんを通じて役所に願い出た。役所ではそれは良いことだ。役所も協力すると言ひながら全体像を構想して返事をくれた。それは国と国がやるような規模で、私達のような個人規模の及ぶものではなかった。それを日本国に申し出ても、何年もかかるであろうし内蒙古自治区に建立を望めるとは思われない。

公園のような規模で、養父母の名が入ることを希望した内容であった。私は養父母の名が出せないことで断念した。現場から背負って連れて來た人は命の恩人だ。一時的にせよ預かって何日か過ごしてくれた人も恩人だ。大人になるまで養育してくれた人は養父母として生涯忘れないが、その途中の恩人の名は分からぬ。

自分が幼児であれば日本の両親さえ名前が分からぬ。自分を拾ってくれた地元の人も大の恩人だが名前が分かる筈もない。

地域全体の現地人が全部恩人なのだ。中国人全体が養父母だと言っても差し支えない程多くの慈愛を受けたのだ。

私達の会で残留孤児を招待して語る会を開いた。

一〇数項目のアンケートで満点になっていた項目は、養父母への感謝と、戦争は絶対にいけないと回答だった。日本国では十二歳以下を残留孤児としたが、情のない言葉だと森繁久彌さんが書いている。

私も思う。邦人遺児だったのだと思う。人を思う気持ちが役所にはないようだ。

後期高齢者の言い方も同じだ。敬寿高齢者の新語を作れば良いことである。

(おおしま・まんきち：1935年生まれ。群馬県出身。1945年8月、興安街から避難の途中にソ連軍の襲撃を受けた葛根廟事件の生存者。1946年10月に帰国。日本で4年生をやり直した。葛根廟事件の犠牲者を慰靈する会、興安街命日会の代表。私製本『流れ星のかなた』『美咲の源流』『やまびこの天地』他著作多数。

王希奇「一九四六」高知展を開催するにあたって

崎山 ひろみ

中国人歴史画家・王希奇氏が、中国葫蘆島港から引き揚げる多くの日本人を描いた大作「一九四六」を、今年 2021 年 1 月 28 日から 2 月 5 日まで高知市で絵画作品展として開催することになりました。

2017 年東京展の後、石子順氏（漫画、中国映画などの評論家）より「一九四六」の図録（縦 30 cm、横 2m）が送られてきました。実物の 10 分の 1 ということですが、蛇腹に折りたたまれた大きな図録を見て衝撃を受け、なぜ中国の方が、このような日本人引き揚げの絵を描かれたのかと不思議でした。

その後、王希奇氏の DVD のメッセージを入手することができ、経歴とともに王氏の平和への強い志を感じました。王氏は、日中関係が悪い時もこの絵を描くことをやめようなどはありませんでした。どのような国において、それは本当に不屈の精神力がなければできないことです。政府から悪く思われようともご自分が意義があると思われたことに全力を尽くされたのです。その精神の高さに感激しました。

縦 3 m 横 20m の巨大な絵の中に、あの当時の自分がいたのだと思うと、胸が熱くなる思いでした。引き揚げ港の葫蘆島までたどりつけなかった人も大勢いたのです。また、たどりついても乗船してから亡くなった方もいました。戦争は一般の弱者にも厳しい試練を与えるました。

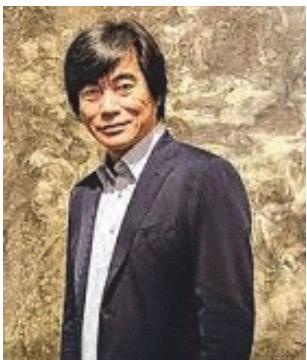
下記は王氏の DVD のメッセージです。

「私は歴史写真を集める習慣がある。歴史写真が大好きなのだ。過ぎ去った月日は美しいものだと思っていた。そして経験したことのない過去の歳月において当時の人々はどう生きていたのか、どんな状態にあったのかを知りたいと思う。また、その時、私はどこにいたのか、常に自分に問い合わせたのだ。私は、自分の視覚の命を延ばすには、これまでのことを掘り起こさなければならないと思う。

ある日、私はネットで、1 セットの写真を見つけた。その中で、ある男の子が、あるものを胸に抱えていた。その時、何が包まれていたのか知らなかつたが、ただ男の子の恐怖の表情がとても印象深いものだった。調べていたら、それは 1946 年に起きた事件であったことを知り、そしてそれが当時撮影された写真だと分かった。その後、私は何度もその他の資料と歴史写真を調べたりして、遠く歴史の埃に埋もれそうになったこの歴史を知つ

たのだ。またその残酷さを身に染みて感じ取った。

この「一九四六」を創作するには、3年半の時間がかかった。この期間には作品を覆して、再構築し、そしてまた覆して、再構築を繰り返していた。まさにこの絵を創作する過程も、引き揚げを体験したような大変つらい過程だった。



この「一九四六」という歴史題材について、私は「移動式」という鑑賞の仕方をとった。人々に歩きながらこの作品を見てもらいたい。人は物事を考える際、無意識に歩き出したりすることがある。歩き出すと考えることにプラスになるようだ。その場合、画面から大量の情報を読み取ることが求められてくると思う。

私は中国壁画の表現様式、長幅式の表現様式をとった。最終的に絵を長さ20メートル、高さ3メートルに決めた。絵の高さは、見る人が画面の外側にいるか、或いは画面の中に入るかということを左右する。私は皆さんに、この歴史の現場に入り込み、左から右へ移動しながら見ていただきたいのだ。この「一九四六」を創作する過程においては、全体的情緒の把握が非常に重要だと思う。画面の色彩、見る側のリズム、光の配置などを考慮し、特別な手法を使用した。いわゆる科学による光線の配置手法を取らず、私自身の理解した「ホタル」式の光の手法を取った。個々の人物自身の放つ光を通じて人々が生き残ろうとして現れてきた生命の強さを表現したいと思った。

私は、絵画の「読みこなし」も大事だと考える。それは小説と同じように、一文字、一セントンス、一段落をじっくり読むことによって、最終的に作品全体から何かを感じ取れるだろう。

私は絵を見た皆さんに伺いたいのは、絵そのものの良し悪しに関することではなく、この作品から感動を覚えていただけたかどうかということなのだ。」

【王希奇氏 略歴】



画家。中国錦州市に生まれる。魯迅美術学院油絵学部に勤める。中国美術家協会会員。

東洋的墨絵の要素を西洋油絵に自然に融合させた画風で評価される。特に歴史をテーマとする創作を得意とし、その独特的な画風とオリジナルな視点で国内外の注目を浴び、既存の流派に属さない独立した芸術家と評される。なかでも、国家金メダルを獲得した《三国志・赤壁の戦

い》(合作)、中国国家重大歴史題材美術創作プロジェクト入選作品《長征》、《遼瀋戰役攻克錦州》(合作)および《官渡の戦》などの大型絵画が代表作である。油絵のほか、墨絵の《回声》、《高原人》、《聴雷》などの作品も全国美術作品展に入選。数多くの作品が中国美術館、中国国家歴史博物館、中国国家軍事博物館などに収蔵されている。

私はこの絵をぜひ見たい、そして一人でも多くの方に見ていただき、満洲の歴史とともに王氏の平和への願いを感じていただきたいと思い仲間に訴え、実行委員会を立ち上げました。

2019年に開催した宮城展の実行委員会、のちに支援する会となり、高知展開催に向けて多大な支援をいただき、実行委員会として今は11月28日に向けて準備を進めています。私たちは、まだ絵の実物を見たわけではありませんが、宮城展で「一九四六」を見た方の鑑賞記を読んで、さらに強く多くの方に見ていただきたいと思いました。

王希奇（日本人引揚者を描く）「一九四六」をめぐって（鑑賞記）

菅原 順一

2019年10月1～6日宮城県美術館で、中国の歴史画家王希奇氏の巨大絵画「一九四六」の展覧会があった。

搬入当日、展示指示で忙しく動き回っていた王氏は足を止めて対応してくれ、奥さんが日本文化の研究者でもあり流暢な日本語で通訳してくれた。王氏の話を聞くうちに平和への熱い思いがただならぬものであることを感じ、作品の制作エピソードをいろいろ聞くことができた。一人の絵描きのその作品の製作意図やテーマの追いかけ方に学ぶことが多い展覧会だった。

正面の壁いっぱいに、縦3m横20mの絵画、その作品の巨大さと重厚な表現力に圧倒された。帰還の港「葫蘆島」にかろうじてたどり着いた人たちの無数の群れが克明に描かれていた。

写真であれば個々の家族のドラマは表現できずに群衆の波にしかならないものを、絵画であるがゆえに、作者の制作意図によって焦点を絞って表現できる。大きな荷物を背負った家族、赤ん坊を抱えた女、遺影を取り出して語り掛ける人、遺骨を首にかけた子ども、子どもを背負い松葉杖で急ぐ人、担架を担いだ従軍看護婦たち。様々なドラマを群衆の中にスポットで浮き上がらせたように組み合わせる。中国にも日本にも絵巻物の伝統的な表現はあった。左から右へとゆっくりとそのドラマを見ながら歩く。20mを横切り、20mを

戻り、さらに右上の帰還船までもう一度歩くと 60m歩いたことになる。王氏は言う。「ひとはものを考える時、ゆっくり歩きながら思索することが多い。」このテーマを絵にするとき、10mでは足りず、20mが必要だと考えたという。

ピカソの「ゲルニカ」は 3,5×8m。メキシコの壁画家シケイロスたちも巨大な壁画を作った。そのいずれもが平和の希求がテーマだった。王氏の絵画の大きさは、その作品の前を移動することで想いを巡らせる、そんな意図があつての 20mだった。この絵の前にいると、自分もこの群衆の後ろに並んでいるかのように錯覚する。タイトルの「一九四六」年に居合わせたような・・・。

王氏と絵の前を歩いていて、この港にたどり着きたくともたどり着けなかつた無数の人たちがいただろうという話が出たが、王氏はそれもこの絵の中に描きこんでいた。帰還船に急ぐ群衆の奥に、遠近法からすれば異様に背の高い樹氷のような黒い影がいくつも描かれてた。港の左の船も異様に大きい。これだけのデッサン力のある作家が間違えたはずもなく、それも意図的。荒野ばかりだった満洲からかろうじて生きて港にたどり着いたときの船は大きく見え、港の匂いや低いエンジン音までもが感じられるようなデフォルメだったにちがいない。

王氏の作家としての思考の奥深さは、照明などにもあって、展示の時に作品の左に照明が当たっていなかったことを照明の担当に確認すると、王氏の指示通りだと言う。左を暗くすることで、帰還船に搭乗しようとする右に、視線を誘導しようとする意図があったのかと感動。その他の絵は、満洲に渡った人たちが目にしたであろう記憶の画像である。他国を侵略した日本人の野望は夢の断片となって人々の脳裏に点滅する。

この展覧会は単なる美術展ではなく、地球上で今起きている紛争問題、難民問題と重なり合い、さらに核兵器、原発問題、地球温暖化など、行方の見えない人類そのものが「難民」であったことを暗示している。「ノアの箱舟」の神話はそのまま現実となって今に至っている気がしてならない。

王氏の仕事は、過去を題材にしながらの現在の私たちに警鐘を鳴らし続けている。

菅原順一 略歴 1948 年、宮城県気仙沼生まれ。美術家平和会議 事務局長（1987 年～1992 年）第 64 回平和美術展 実行委員長 駒澤女子短期大学・保育科（造形）准教授 2014 年退職

王希奇「一九四六」高知展

1. 開 催 2021年11月28日（日）～12月5日（日）※11月29日(月)は休館

9:30～18:30（最終日は16:00まで）

2. 会 場 高知市文化プラザかるぽーと 7階 第1展示室

3. 入場料 一般前売り￥1,000（当日￥1,200） 学生・高校生以下 無料

4. 主 催 王希奇「一九四六」高知展実行委員会

実行委員長 柳井 卓

副実行委員長 大野正夫／崎山ひろみ

事務局長 小野由美子

5. 開催趣旨

日本敗戦後、旧満洲（中国東北部）にいた日本人約155万人は、過酷で悲惨極まりない状況におかれていきました。翌年5月頃からようやく引き揚げが始まり、（蘆）港からは約105万人が引き揚げてきました。その葫芦（蘆）島港からの引き揚げの象徴的な写真集の中に「母親の骨箱を抱えた子供」の姿がありました。その写真を目にした中国人歴史画家・^{わんしーちー}王希奇氏は自らの心の葛藤を乗り越え「戦争ではいつの時代も弱者が苦しむ。彼らも戦争の被害者だ。」という強い思いのもとに、油絵と墨絵の融合による独特の技法で引き揚げ船に乗る憔悴しきった数百人の姿を描き出しました。作品「一九四六」は縦3m横20mに及ぶ大作であり、作者の強烈な平和への願いが感じられます。また、芸術的にも優れた、見る価値のあるものです。

この作品の過去の国内での絵画作品展は、東京都（2017.9.28～10.5）、舞鶴市（2018.9.28～12.2）、仙台市（2019.10.1～10.6）で開催されました。高知での絵画作品展が終了すれば「一九四六」は中国へかえることになっています。

高知県の満蒙開拓団送出数は10482人（人口比 全国3位）で、約2000人が亡くなっています。引き揚げ75周年にあたる2021年、高知で絵画作品展を開くことは大きな意義があると考え、企画しました。

（さきやま・ひろみ：1930年6月旧満州撫順市で生まれ、大連を経て、当時の首都新京（現長春）で5歳から16歳まで在住。敗戦の翌1946年葫蘆島港より引き揚げ。以後高知市に住み、「満洲会」「満洲経験者の聞き取り」「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」などで活動。個人では満洲関係の書籍・資料など収集、寄贈している。）

(一九四六)



満州の歴史を語り継ぐ高知の会について

大野 正夫（高知大学名誉教授）

筆者は、6歳になる前に奉天より引き揚げた。父親が満鉄に勤めていたので、錦州市の社宅で出生し 1945 年の終戦を迎えた。錦州駅は交通要所で内戦の激戦地になるとの情報で、奉天の満州社宅に同居・避難して、社宅内で翌年 8 月末まで過ぎた。満州の生活の記憶は短い年月であったが、私の人生には大きな影響を与えてきたように思う。

両親は満州の事を多く語り、また小学校2年生から4年生までのクラス担任の増田昭一先生が、授業の合間に満州の話をされた。増田先生の語る事は、新京の難民避難所で多くの開拓団家族の孤児たちと一緒に過ごした悲惨な話で、孤児たちは飢えと寒さのチフスに掛かり亡くなつて逝った。私の奉天での生活とあまりに違い、「自分も満州にいました！」と言えず、胸の奥に秘め先生に語る事はなかった。いつか先生に話をしたいと思いつつ、お住まいも定かでなく会う機会なかった。TBSテレビドラマ「遠い約束」を視聴して、先生が私たちに語った事が映像になっており感動した。先生は避難所で一緒に過ごし亡くなつて逝った孤児たちのことを 3 冊の本と 3 冊の絵本についていた。しかし、ご自身のことは語っていない。そこで、筆者は、先生から聞き取りをして、先生の生涯をまとめて「大地の伝言」として出版した。

筆者個人のことを長く書いてしまったが、高知には、戦中、戦後を新京で高等女学生として過ごし、過酷な生活をされた崎山ひろみさんがおられる。崎山さんは多くの時間をかけて、満州に関わる多くの本や資料を集めて、高知大学図書館に 3000 部あまりを寄贈して、貴重文献・崎山文庫となり、満州に関わる多くの事業を高知市で行われてきた。高知県は満蒙開拓団や満蒙開拓少年義勇軍として、満州に渡った方は 1 万人以上で、人口比では全国 3 位である。健在な方もおられるが満州体験者は激減している。幸い高知大学の先生方や高知城歴史博物館の館長、マスコミのスタッフなど、満州に関心の持つ方が高知県に多くおられて、今の時期を逸したら、満州は忘れ去られてしまうと、有志を募って、「満州の歴史を語り継ぐ高知の会」が、2018 年に立ち上がった

高知の県民にとって満洲は、多くの県民が移民した非常に身近な地域であることもあり、“満州の集い”を開催すると多くの方が参加して下さる。「満州の歴史を語り継ぐ高知の会」の活動として 2019 年 7 月 13 日、高知大学人文社会科学系プロジェクト「地域における平和学研究」と連携してシンポジウム「第1回満洲の歴史を語り継ぐ集い」を高知市で開催しました。

この集いには、大学生、教職員ら 70 人以上が参加し、さまざまな視点から高知県に関わる満洲の歴史を学ぶ機会となりました。この集いは、『第1回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集』として 2020 年 3 月刊行した。

2020 年度は、第2回シンポジウム「満洲の歴史を語り継ぐ集い」を 2020 年 9 月 6 日に開催予定でしたが、台風接近のために開催が中止になった。次の頁に示すように、この集いには、名古屋大学名誉教授 の川田稔先生や国文学研究資料館の加藤聖文先生をお招きして、満洲建国の歴史や語り部事業についてお話ししていただく予定であった。コロナウイルスの感染拡大で再開催の見込みも立たない中、実施内容を活字で残して置くことが重要と考え、『第2回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集・2020 年度事業報告』として刊行することになった。

このシンポジウムでは、特に、満州国の歴史的な背景を、この分野を研究されている加藤先生、満州事変の起案から実行までの多くの謎を川田稔先生に書いていただいた。しかし、報告書の配

第2回 満洲の歴史を語り継ぐ記録集 2020 年度活動報告集(目次)

第1部 :満洲国建国に迫る 陸軍内部から見た満洲事変と満洲国建国(川田稔)、日本と満洲の歴史(加藤聖文)、高知の戦争史料(小幡尚)

第2部: 满洲の歴史を語り継ぐ “残留邦人”の歴史はなぜ語り継がなければならないのか? (加藤聖文)、祖母の命を語り継ぐ(山崎哲)、語り継ぐ活動への思い(崎山ひろみ)、満洲聞き取りの会の記録「満洲で看護婦として生きた(高橋猪利)」(楠瀬慶太)

第3部:2020 年度活動報告 太平洋戦争後の満洲の悲劇—著書:大地の伝言—を教材として(大野正夫)

第1回学習会記録(大野正夫)、第一次大戦時の日本におけるドイツ兵俘虜のことなど(瀬戸武彦)彦)・満洲聞き取り記録の1次整理について(楠瀬慶太)、補論 满州建設労働奉仕隊徳島県隊「アルバム」について(石畠匡基)・(全文はホームページに掲載)

布には限度があるので、この機会に、「満州の歴史を語り継ぐ高知の会」のホームページを開設しました。 <https://mansyu-kochi.yuhocreate.com/> をクリックするとみることができます。

ホームページはこの報告書以外に、今までの刊行物や活動内容、満州関係事業の情報、寄稿が掲載されており、今後この資料を充実してゆきたい。満州情報や満州関係イベント情報も逐次紹介してゆく次第である。ぜひ、このホームページを情報の連絡源として、活用をお願いいたします。

まぼろしの満州の過去・現在 満州の歴史を語り継ぐ高知の会

記録を残し、語り継ぎ、伝え残していくこと。
それがわたくしたちの使命です。

かつての高知県開拓団へ行く道 2017/06/01

事務局案内 → 刊 行 物 → 満州の写真集 → 満州情報資料 →
全国満州関係イベント紹介 → 寄 稿 掲 載 → お問い合わせ等 →

「満州の歴史を語り継ぐ高知の会」は、高知県内の旧滿州（中国東北部）帰国者、大学教員、マスコミ関係者らが、満州体験者が次々と逝去し満州の歴史を継承が難しくなる現状を危惧して2018年9月に結成されました。

以前高知にあった「満州会」などの体験者の懇親会という活動ではなく、次の世代に満州の歴史を語り継ぐ会です。高知県から満州に渡った方々の実数は正確にはわかりませんが、「満州開拓団」、「満蒙開拓青年義勇軍」で渡済した人数は約1万人、人口比で全国4位になっています。

高知県民にとって、満州は身近な地域であったことがわかります。

このホームページは、高知県内外の満州体験者と満州に興味を持つ方々の集い、学習会の報告や満州に関する資料を次世代に残すことを目的で開設されました。

News

2021/03/14 ホームページを開設致しました。

top

Copyright ©満州の歴史を語り継ぐ高知の会 All Right Reserved.

東日本大震災からの 10 年間を振り返って

堀 泰雄

被災地を頻繁に訪問するようになった 2 つの理由

2011 年 3 月に東日本大震災が起こってから 10 年が経った。この間、私は 100 回以上、東北の被災地を訪問した。何でもないただの老人が、こんなに多く東北を訪問したのには、大きく 2 つの理由があった。

第 1 は、1991 年から、エスペラントによる「Raportoj el Japanio (日本からの報告)」を書き始めていて、最初に本として出したのが 1998 年、それ以降毎年出し続けていて、自分をいっぱいのジャーナリストと思っていたからだ。これほどの大事件を、ジャーナリストが世界に発信しないわけにはゆかない、しかも 4 基の原子炉が一度に破壊されるという世界史に残る大事故付きなのだから、これを報告し世界に警告を流すのは避けては通れない仕事だと思ったからだ。そのためには、現地に足を運ばなければならない。そして被災地詣でが始まった。

そしてそのうち、この報告活動で「世界を変えるのだ」という気持ちになってきた。原発は、人類と相いれない、原発がはびこれば、人類は必ず破滅する、と思ったからだ。それで、原発事故の被災地にも、しばしば足を運ぶようになって、その報告を、私のパソコンに入っている 1000 人を超える外国人に送り始めた。どのくらいの人が読んでいるかはわからないが、中には、さらにそれを友人に拡散したり、エスペラント会の会報に転載したり、エスペラントの雑誌にも載せてくれたりした。また、自国語に翻訳して、拡散してくれる人も現れた。多くの人がもっと知りたいと思っているのに、日本からの原発事故の現状が、マスコミに出ない、そんな不満に、私の報告が応える形になった。

第 2 に、岩手県釜石市唐丹の 104 人の生徒の支援を始めたからだ。支援は 1 年で終わるわけにはいかず、9 年間にわたった。その間、毎年、小学校の卒業生には 7 万円、中学校の卒業生には 12 万円の卒業祝い金を渡し、最後には 270 万円のピアノを小中学校の共同体育館に寄贈して、2020 年 3 月、成功裏に 9 年間の支援を終了した。この支援活動によって、釜石には必ず 2 回（文化祭と卒業式）は訪問することになり、また旅行を組織したりしたので、宮城、岩手の沿岸地域は、行かない市町村がないほどになった。



この支援活動で、地元の人とも親しくなり、それに伴い、旅行記や見聞記などの材料が集まり、それらをエスペラントでは「日本からの報告」に、日本語では「世界の旅人堀さんの気ままエッセー」に書いて、毎年出版（合計それぞれ 10 冊）してきた。また、撮ってきた写真や描いてきたスケッチ、拾い集めてきた津波の遺品などを素材に、それらは「震災シリーズ」（日本語・エスペラント対訳）として 6 冊出版した。まさに、東日本大震災で、エスペラント作家として（世界に？）認められるようになってしまったのである。添付した写真は、それぞれのシリーズの、2020 年に出版した本の表紙である。

被災地で心を打たれた出来事

被災地には、悲しみが満ち溢れていたから、心を動かし揺さぶるような話はたくさんあった。そのうちの 3 つを紹介したい。

馬鹿な俺オレでも「絶望」の意味が分かった

2014年1月に、岩手県大船渡市を訪れた。夜、仮設の飲み屋街に飲みに行って、地元の若い漁師に出会った。彼の家は高台にあって、津波の影響は受けなかったのだが、沿岸では大被害で、遺体を探し回った。

「オレのいとこが、海岸のテトラポッドにさかさまに引っ掛けっていたんだ。それを見て、こんな馬鹿なオレでも『絶望』という言葉の意味が分かったよ。」

新聞に出る話では、「遺体は、眠っているようで、顔にも傷がなかった」というのがほとんどだが、実際は凄惨なものだったろう。この若い漁師の言葉は、忘れられない。



小高小学校の黒板

福島県南相馬市は、市内の小高地区が福島第一原発から20キロ圏内に入り、住民は避難せざるを得なくなった。小学校も無人になった。1年後、許可を得て入れるようになり、先生たちが、残務整理に戻ってきた。私は、その1年後、2013年8月に、小高小学校へ行ってみた。「学校再開の準備」ということで業者が仕事をしていた。「中に入っていいかい」と聞くと、気楽に「いいよ」という。それで教室をのぞいて回った。それぞれの教室の半分くらいの机の上に、子どもたちの持ち物が並べてあった。何もない机の子どもは、この間ここにきて自分の持ち物は持ち帰ったのだが、残っている机の子どもは、ここに戻れないほど遠くに避難したのだろう。黒板には、先生からのメッセージが書かれていた。涙なしには読めないメッセージだった。写真は、そんな教室の一つだ。私は、その後も毎年、小高小学校を訪ねた。机の上の持ち物は、ずっと変わらずそのまま置かれ、やがて開校を機に、片づけられた。どこかに取ってあるのか、捨てられたのか。

2016年の暮れに、朝日新聞の記者と、当時の小高小学校の先生を探すことになり、飯舘村の小学校に転勤していた一人の若い女の先生と出会った。彼女は、その小高小学校に新任で来て、そのクラスを担任していたのだった。自分の担任の子どもがどこでどうしているやら、彼女の顔には憂いがあった。そんな彼女に、私は、やはり小高から逃れ、南相馬

市原町区で開店したお菓子屋から買ってきたケーキをあげた。原発事故に負けず、コロナに負けず、元気でいるといいのだが。



大震災記録碑

震災から 2 年を過ぎると、あちこちに震災の記念碑や慰霊碑などが建てられるようになった。福島の浜通りには、交通機関がないので、私はしばしば愛用の自転車をもっていつて、あちこちを巡った。車でも徒歩でも行けないようなところを、自転車なら入って行ける。そんなある日、南相馬市原町区小浜という部落に立っている碑を見つけた。それは、慰霊碑ではなかった。「大震災記録碑」とあり、そこに記されている名前は、震災前にこの部落に住んでいた 271 人のものであった。この碑を建立した人は、もうここにいたすべての住民が決してここに戻ることはない、と考えたのだ。唐丹町は大被害を受けた。しかし元の住民は、仮設に住みながら、唐丹町に戻る努力を続け、ほとんどは、唐丹町に戻ってきた。しかし、原発の被害地では、元の町に戻ることはできないのだ。第一、四散した元の住民が、現在何処に住んでいるかの把握もほとんど不可能だろう。ここに、津波と原発事故の大きな違いがある。原発事故は、町を壊すだけでなく、人ととのつながりも破壊してしまうのだ。

私は、実を言えば、唐丹の子どももより、福島の子どもを支援したかったが、福島の被災地は、コミュニティが破壊されてしまったので、唐丹でやっていたような支援活動は不可能だった。2020 年の初め、私は、福島で裁判闘争を闘っている「子ども脱被ばく裁判の会」の存在を知り、唐丹支援の終了とともに、この会に寄付を始めた。まだ地裁段階だから、何年続くかわからない。コロナが収束したら、寄付だけではない参加を考えている。

エスペランチストの暖かい心

唐丹支援基金の成功は、私が参加して、日本の、世界のエスペランチストが協力したことによつた。唐丹希望基金に寄付をしてくれた人は、全体では 300 人、このうちの半数近

くはエスペランチストだ。震災当時私がフランスへの講演旅行を毎年行っていたこともあり、フランスのエスペランチストは、とても暖かく寄付をしてくれた。そしてそれは一年だけにとどまらず、その後も世界エスペラント大会の折に、集めてあったお金を渡されることもあった。エスペラントを作ったザメンホフは、ホマラニスモ、人類人主義の実現を目的にエスペラントを作った。そのことは、もちろん私は知っていたが、エスペランチストが本当にそれを実践していることを、この支援活動の中で知った。私は、そうした暖かい心の人たちとともにいる、これもこの10年間で学んだことだった。

(ほり・やすお：公立高校の英語教師のころ、両親を見習い、エスペラントを学習し習得。福島原発事故被災の実情を世界のエスペラント界の友人知人に発信している。群馬県前橋市在住。本会会員)

パンデミックの先へ

—これからの世界と日中関係にかける私の思い

木村 知義

「反中」「嫌中」が日本社会を覆う中で

「なにもかも、とにかく反中、嫌中ばかり、一体日本はどうなっているんだろう。72年の日中国交正常化の頃日本中にあふれた日中友好にかけた熱い感情はどこに消えてしまったのだろうか。尖閣、尖閣と言うが、かつて両国の首脳間で、それぞれに言い分があつて言い出せば対立するばかりなので未来の世代に託そうということにしたことを、日本人は忘れてしまったのだろうか・・・」

学生時代からの、すなわち50年来の友人から久しぶりにかかってきた電話のことだ。

「まったくその通りだね」とは返したが、継ぐべき言葉もなく、ただただ、本当にひどい状況になってきたなとお互いに「嘆く」ばかり。

日本における「反中国」感情の蔓延は尋常なものではない。

中国の王毅外相・国務委員の来日に際しても、その前後、テレビも新聞も「尖閣問題」を俎上に挙げて中国非難の論調一色に染まった。領土問題は歴史的にも、そして洋の東西を問わず、国民感情を、さらに踏み込んで言えば、その内に潜在する「劣情」を刺激するテーマだと言っても過言ではない。尖閣諸島がどこにあるのかさえ定かでない人にとっても「センカク」は中国を非難すべき「言葉」として知らない人はいないという世情である。

「EUがうまくいっているとは言えないかもしれないが、国境がいわば黒々とした実線から点線になるという歴史的な実験だととも言えるのではないだろうか。今回のコロナ禍でやむなく最後は出入りを制限することになったが、なんとか域内の自由往来を維持しようと懸命だった。領土や国境というものは長い歴史で見れば固定的なものではなく、そして将来、国と国の関係次第でだんだん意味のない『点線』になり、さらには『消えていく』という感覚が大事ではないだろうか。今のわれわれは歴史に逆行と言うか退行しているのかもしれない。愚かなことだ・・・」。私なりの持論を述べてみた。

「そう言われれば、尖閣諸島を国有化するなんてことは、冷静に考えれば愚かなことだったというべきだな・・・」と友人が締めくくって、ほぼ半年ぶりの会話は終わった。

電話を切った後、あらためて、さて、どうしてこんな世情になったのだろうかと反芻してみた。国際政治の力学、あるいは安全保障論さらには地政学など論理的に深く分析すべき問題があることを知らないわけではないが、1960年代からの友人との久しぶりの会話によって、生活感覚に引きつけて、言ってみれば、平たく考えを巡らせてることにしてみた。

「追いつけ、追い越せ」とひた走った先に見た喪失感

同世代人として団塊の世代の耐えがたい浅薄さに厳しい批判の念と距離感を抱いていることを前提にしてだが、われわれが物心つくころからすべてが激しい競争社会だった。そして職に就いては「企業戦士」などと言われ、「24時間働けます！」とひた走ってきた。世は「追いつけ、追い越せ」一点張り。ひたすら「世界一のアメリカ」の背を追い、そして高度成長へ。気がつくと「ジャパン・アズ・ナンバーワン」ともてはやされる時代へ。しかしそれも儂く、その後はもはや書く必要もないが「失われた10年」が「20年」になり、依然光の見えない厳しい時代を生きることになっている。そこに今回のパンデミック、コロナ禍である。不条理にあえぐ社会の底流に鬱積するものが充満しているのかもしれない。

考えてみれば、わがニッポンは「追う」ことは達者だったかもしれない。しかし追った先にどんな世界を創るのかについては描くことができず、ひたすら追うことばかりに懸命になり、結果、追われ、追い抜かれることには耐性がなかったと言えるのではないだろうか。すなわち、敗戦後ずっと日本が基軸にしてきた日米安保の盟主「世界一のアメリカ」にはかなわないとはい、あれだけがんばって世界第二の経済大国になったにもかかわらず、気がつけば中国が背後に迫り、あまつさえ、あっと言う間に抜き去ってずっと前に走っていってしまったのだ。自分の脚に確たる自信を持てなくては、そしてその先に目標を、夢を描けなければ、長いレースを走り続けることはしんどい、辛い。言葉を変えれば、己を知ることなくレースは続けられないのだ。残るのは、なぜ、ずっと後ろから来たはずの中国に追い抜かれるのだという焦りと喪失感、そしてついには妬みと嫉み。そこに、近代以来、あんな「遅れた国」には負けるはずないと埋め込まれた「歪んだ自負」。しかも、戦後生まれのこっちは自由と民主主義の国、やはり頼りは、世界のアメリカ！

たとえて言えば、こういうことなのかもしれない、と思い至ったのだった。あまりに雑駁に過ぎるという誹りは覚悟の上で、あくまで平たく言えば、の話である。しかし、それは事が、すなわち問題が平たく済むということでは決してない。敗戦後の日米安保条約、後に、気がつけば日米同盟という言葉にすり変わってしまった（いまだに同盟を、いつ、誰が正式に結んだのかは定かではない！）歴史展開の中で、米国の傘の下で「追いつけ、追い越せ」でひた走ってきた「国のかたち」、すなわちわれわれの「ありよう」について、ここは立ち止まってひとたび深呼吸して、深く考えてみなければならないのではないか。世界の中での、そして、少なくとも近代以降の歴史のなかでの自己認識を誤りなく確たるものにしなければならない。でなければ、日中関係の未来を描くことなどおぼつかないというべきだろう。

友人からの電話がきっかけとはいえ、なんと回りくどく、遠回りしたことだろうか。しかし、なぜ「反中」「嫌中」の蔓延する日本なのか、そのほんの一断面にしかすぎないにしても、こんなふうに思いを巡らせたことも無駄ではないはずである。いまや高齢世代に入ったいわゆる団塊の世代の大雑把な意識の流れという限界を踏まえたうえでのことではあるが、煎じ詰めれば、今後の日中関係を考えるうえで、なんとも重く険しい日本の現実を突きつけられていることを忘れてはならないということになる。

バイデン政権と世界、米中、日米関係はどう動く

米国新しい大統領がバイデン氏にということで今後の米中関係についての分析、考察がさまざまに重ねられている。「日米関係の核心的問題は中国問題である。日米関係は日中関係である」という松本重治氏の言葉を引くまでもなく、今後の世界と日中関係を考える際に米中関係がいかなるものになるのかは核心をなす相関変数となることは言うまでもない。そこで、バイデン氏の外交・安全保障政策についてである。材料は様々あるが、ここはバイデン氏自身に聴くことが肝要だろう。

大統領選挙の年、2020年3月、米国の外交問題評議会の発行する「フォーリン・アフェアーズ」に寄稿した論稿でバイデン氏は「地に落ちたアメリカの名声やリーダーシップへの信頼を再建し、新しい課題に迅速に対処していくためにアメリカと同盟諸国を動員しなければならない」と述べて「もう一度、アメリカが主導する世界を再現する必要がある」と強調した。ここに米国の次期政権の基本的なスタンスが端的に示されている。

加えて言えば12月7日米国の戦略国際問題研究所(CSIS)のレポートとして発表された第5次となる「アーミテージ・ナイ報告」とまさに平仄の合うものであることも忘れてはならないだろう。日米同盟の強化を謳いながら、なかんずく「日本を対等に」と強調しているので、あたかも日本の自主的な外交・安保が重んじられるといった解釈を語る向きもあるが、ベクトルは逆だと考えなければならない。バイデン氏の言葉を借りれば「同盟諸国を動員」するということである。すなわち、米国の中で米国とともに動く日本でなければならない、これまで以上に米国の意のままに汗を流し働くことを求められるということである。端的には米軍とともに「たたかう」日本でなければならないというわけだ。この場合の「たたかう」相手はといえば、中国であることは論を待たない。中国に対抗する米国の、まさに身内として行動を共にし、共に「たたかう」ということである。

トランプ政権時代に顕在化した「米中対立」は単にトランプ氏という個性によって起きたものではなく、深く、構造的なものである。経済のみならず国際的な影響力を含む、中国の国力の急速な崛起に対して米国が抱いた危機感、焦りがもたらしたものである。さらに、改革開放に踏み出した中国に、米国流に「テコ入れ」すれば中国は米国が望む姿に変わるとと思っていたが、そうはならなかったという「失望感」である。冷静に考えればそれは冷戦終焉後の一国覇権に驕る大国・米国の不遜と言うべきなのだが、そんな論理は省みられることなく中国共産党が主導する中国へのイデオロギー的敵対姿勢にまで広げてしまった。ゆえに、バイデン政権になったからといってこの構図が本質的に変わることはないと考えるべきだろう。もちろん、経済や気候変動などの課題においてトランプ政権時代とは異なる展開はあるかもしれない。しかし、政治・軍事的に中国を牽制、圧迫するために同盟国との連携を深める動きは弱まるとはないと考えるべきだろう。加えて、5GやAI、量子コンピュータなど先端技術分野における、いわゆる「技術覇権」をめぐっては徹底して中国を排除する戦略を駆使することは想像に難くない。バイデン政権が過去の「米国主導」に戻ろうという発想を捨てない限り「米中対立」は長期にわたって続くと考えなければならない。

日米同盟基軸の日本、対中戦略とこれからの日中関係

そこで、日中関係である。バイデン政権においても日米同盟の一層の強化という基調は

変わることはないということはすでに述べた。バイデン氏は「アメリカの未来を左右する地域で共有する価値を進化させるために、安保条約を締結しているオーストラリア、日本、韓国との関係に再投資し、インド、インドネシアなどのパートナーとの関係を深める」と述べるとともに「アメリカの安全保障コミットメントは取引ではなく、神聖なものだ」（前述「フォーリン・アフェアーズ」2020.3）と強調している。

菅政権もこれに呼応、寄り添うように、日米同盟基軸の強化と「自由で開かれたインド太平洋」構想で米国との連携強化を目指す考えを再三にわたって示している。この日米安保条約にもとづく同盟関係に加えインド・太平洋地域まで広げた安全保障観が目指すものは、中国への牽制、中国包囲網に他ならない。一方、「日中の安定は、2国間だけでなく、地域、国際社会のために極めて大事なことであり、共に責任を果たしていきたい。今後も首脳間を含む、ハイレベルの中で、2国間及び、地域、国際社会の諸課題について、緊密に連携していこうということで一致した」。首相就任後の習近平主席との電話会談を終えた菅首相はこう語ってもいる。すなわち、中国への対決、牽制を内に孕んだ日米関係に強く縛られた日本がその「くびき」の下で日中関係の発展をめざすという大きな矛盾をはらんだ日中関係ということになる。その矛盾をどう乗り越えるのか、日本は、バイデン政権の下できわめて重く難しい課題に直面することは間違いない。

ここでわれわれが深く考えておかなければならぬことは政権のみならず、日本のわれわれすべてがこの矛盾とどう向き合うのかという命題に直面しているということである。

矛盾はらむ日本の対中政策、「二心者」は信頼を得られるか

ここでまた平たく物事を語ることにすると、「二心者」は信頼を得ることができるだろうかという命題である。

「自由で開かれたインド太平洋」構想と書いたが、元は「自由で開かれたインド太平洋戦略」であった。「戦略」では「近隣諸国」を刺激するので「構想」と言い換え、最近では「構想」という言葉も略して「自由で開かれたインド太平洋」と使われることも多い。では「自由で開かれたインド太平洋戦略」の由来はどこにあるのか、問題はここだ。2012年、安倍晋三氏が二度目の政権に就くのと時を同じくして発表された「民主主義のセキュリティ・ダイヤモンド構想」である。150か国の新聞メディアをはじめノベール賞受賞者、著名な経済人など「錚々たるメンバー」によって構成されると謳うNPO「プロジェクト・シンジケート」のWebサイトに寄稿されたものだ。安倍氏はこの稿で、南シナ海が「北京の湖」になりつつあると警戒感をあらわにするとともに「東シナ海で中国に屈服してはならない」と強い決意を披瀝した。そして「日本外交は常に民主主義、法の支配、人権尊重に根ざしていかなければならない。これらの普遍的な価値は戦後の日本外交を導いてきた」ゆえに「アジア太平洋地域における将来の繁栄もまた、それらの価値の上にあるべきだ」と述べている。こうした戦略観に立って「インド洋から西太平洋にかけて共有する海を守るため豪州、インド、日本、米国・ハワイを結ぶダイヤモンドを形成する」安全保障戦略を提唱したのだった。いまわれわれが目にし、耳にする「自由で開かれたインド太平洋」の原点はここにある。そのめざすところは「中国への牽制」あるいは「中国封じ込め」の戦略にほかならない。

しかし今、「自由で開かれたインド太平洋」は、「中国という国名に直接言及しないことで、相手国が賛同しやすいよう配慮している」のがポイントだとメディアは語る。経済的に深く結びついている中国に対して「一定の配慮を示しつつ、日本が他国との関係を強化すれば中国へのプレッシャーになり、対中外交にも良い影響を与える」とも言うのである。「他国との関係を強化すれば」という言説の含意もまた深く吟味する必要がある。

「受け身の日米同盟から積極的日米同盟に切り換えるべきだ。日米安保体制を基軸にしながら、日本は東南アジア諸国連合（A S E A N）10カ国との関係を強化すべきで、そのためにはまずA S E A Nに行くべきだ。とりわけベトナム、インドネシアだ。そうすれば中国もその圧力を無視できない…」

「政界ご意見番」と言われる評論家が首相就任時に菅氏との面談に随伴した「著名なジャーナリスト」を通じてこう助言したというのである。すなわち、まず中国の周りを固めろ、その圧力をもってすれば中国も日本の力を無視できないというのだ。自民党のある派閥の会合に招かれたこの評論家の講演を聴講した時のことである。そして、この「ご意見番」の言う通り菅首相は実行した、というストーリーとなっている。

「二心を抱く者」は信頼を得ることができるのだろうか。日中関係にかかわって、あるいはアジアと世界に向き合いながら、菅政権発足以来繰り返し考え続けたのはここに尽きる。加えて言えば前述の「ご意見番」の助言にあるような「他を好み目前の『相手』を打つ」という「思考」も含め、「二心」は人の真の信頼を得られるのかということである。

言うまでもないが、この矛盾をはらむ対中政策を「日本外交の苦渋の二面性」と表現することも知らないわけではない。しかし、対中国外交を「中国を名指ししない」という「言葉の手品」でもって、あるいは、己の力のみでは容易ではないので「周りを恃んで」包囲すればという「発想」で構想することでいいのであろうか。否、中国と向き合う時それで乗り切ると心底思っているのだろうか、為政者、外交担当者たちは。そして、まさしくこれは、日本に暮らすわれわれすべてが突き付けられている命題でもあると言うべきである。

協働のプロジェクトを通じて信頼を築く歩みへ

日中関係は飛躍的に好転した、とは日中双方の外交関係者から等しく聞かれる言葉である。しかし実態はと言えば冒頭に記した通り「反中」「嫌中」が蔓延する日本の世情である。要は、日中関係に本来必要とされる信頼関係がきわめて脆弱なものとなっているということだ。だからこそこの日の日中関係と向き合うには旧に倍する知恵と努力が必要となる。

まずは、気候変動、環境問題など日中で協力、連携できる具体的なプロジェクトを一つでも多く見出して相互の協力、協働を進めるなかで日中の信頼関係を一歩一歩築き、強化していくことが大事になる。その意味では数ある日中関係団体の中で日中科学技術文化センター（以下センターと略）の果たすべき役割は大きく、重い。たとえば「脱炭素社会」にむけて日中両政府が目標を掲げるなかで、科学技術分野にさまざまな人脈、ネットワー

クを持つセンターができるることは多くあるはずだ。またEVあるいは水素エネルギーの活用をはじめ新産業の研究開発、高齢化社会における医療、介護分野における日中協力、さらにはアニメなど日中両国の若者文化をつなぐ新たな協働のフィールドの開拓など、センターの持てる力をクリエイティブに發揮できる領域、可能性は大きく広がっている。

人的交流がほぼすべて止まってしまうなど、新型コロナ禍は日中双方にとって「禍」であることは否定できないが、この状況をプラスの力に変えていく創造的な発想と知恵、そして努力が今こそ求められている。

パンデミックの先へ、変わる世界、新しい発想と言葉を

その際忘れてならないことがある。もはや世界は変わりつつあるということである。

米国が唯一の超大国として世界を差配、主導する時代は終わりを告げている。世界の重心は中国をはじめとするアジア・ユーラシアへと移りつつある。牽制と排除ではなく、ひらかれた多国間協力によって平和で豊かな世界をめざすことこそがすべての国とそこに暮らす人々に求められ、すべての国がそこに参画することを迫られる時代に変わっていることを忘れてはならない。

それゆえに、これからの中日関係、それと密接不可分の日米関係をも構想する「新しい発想」と「新しい言葉」が必要になる。旧来の安全保障観に縛られず、国の体制やイデオロギー、価値観をこえて多様な世界のあり方を認め合い、平和的に共生し協力と繁栄をめざす思想と言葉と言ってもいい。その意味で、中国の習近平氏が提唱する「人類運命共同体」という理念は、美しい「言葉」であるがゆえにわかには信じがたいという人も多くいるのだが、さらには、その実体についてはまだまだ深める必要があるだろうが、ますます重要な意義を持つ時代になると言えよう。

新型コロナウイルスの地球規模での蔓延、パンデミックの時代に生きる私たちがどれほどの構想力を持てるのか、力強い協力、協働の場をどれだけ多様に創ることができなのか、理想を追求するわれわれの力が試される時代になる。それは同時に、楽しみな試練の時代へということでもあるだろう。

このことを胸に刻んでパンデミックをのりこえる新たな年を歩みたい、そんな想いのこもる年初である。

2020年12月14日記

（きむら・ともよし：1948年生まれ。NHK在職時代、ラジオの特集番組『21世紀日本の自画像』で方正日本人公墓を取り上げる。退職後、2019年まで多摩大学客員教授。現在、「北東アジア動態研究会」を主宰して活動する）

＜解説＞本稿は、一般社団法人日中科学技術文化センター理事である木村さんが、同社団の会報『きづな』（2021年2月発行、新春号）に掲載された原稿である。この原稿を読まれた本会参与の牧野八郎氏がぜひ本誌に転載したらという進言があった。若い時代から日中交流への深い思いを持った木村さんならではの原稿だと思う。（大類記）

『エスペラント

一分断を繋ぐHOMARANISMO』(批評社) を上梓して

大類 善啓

2013年5月に発行した「星火方正」16号に「国際主義を超えてHOMARANISMOを！」

—K・マルクスからL・ザメンホフの人類人主義へ— という原稿を書いた。

「人類人主義」とは、世界共通語エスペラントを創造したザメンホフの思想を表した言葉である。エスペラントでは HOMARANISMO と言う。Homaro (ホマーロ) とは人類、ano (アーノ) は一員、それに ismo (主義) をつけて HOMARANISMO (ホマラニスモ)、人類人主義とは、国や民族を超えて、「我々は人類の一員である」という思想である。

近年、この人類人主義という思想への思いが強かったこともあり、自ら編集している本誌の巻頭にこの原稿を持ってきた。

自分で言うのも気が引けるが、拙文は非常に好評だった。「とても感動した」というメールをくれたのは、本号に<この人にしか語りえない喜びと悲しみ>を書いてくれた旧友の滝永登さんだった。滝永さんはプロフィールにあるように、学生時代にエスペラントを学んでいた。

国際主義から人類人主義へ

そもそも本誌は、方正にある日本人公墓を通して、国際主義精神を広めていこうという趣旨も大きかった。現に、最初のころは本誌の見開きの頁にそのことを記した文章を掲載していた。ところがこの国際主義はいつの間にか、とっくに死語のようになってしまっていた。中国の「人民日報」でもかつては、頻繁に国際主義という言葉は出てきていたが、それが消え、それに取って代わって出てきたのが「愛国主義」だった。

自分が生まれ育った国を愛するという気持ちはわかる。故郷を愛するという心も理解できる。しかし、それが主義として国の指導者が言うと事態は変わってくる。それはともすれば排外主義的な考えを生むことにつながってしまうからだ。

そんな気持ちになっていた頃、改めてザメンホフの「人類人主義」に目を開かれたのだ。その時、本誌に書いた拙文の最後は、今年の3月に亡くなった篠田桃紅さんに触れてこう書いた。

「百歳を迎えた水墨画家・篠田桃紅さんの作品を評してノーマン・トールマンは、『桃紅さんは日本人ですが、作品は日本のではありません。いわば<無国籍>それが魅力です』と語っている（東京新聞 2013年4月17日付け夕刊）。

故郷の文学は大切にすべきである。しかし国籍や民族などにアイデンティティーを求めることはまったく必要はない。拘泥することはないのである」

「わんりい」との出会い

その前年だったか、「わんりい」という日中文化交流市民サークル誌を知った。「わんりい」とは、〈万里の長城〉の万里の北京語読み、中国語だ。2月と8月はお休みだが、それ以外は毎月発行している。

初めて「わんりい」という小冊子をパラパラとめくっていると、中国東北を旅した人の隨想があった。そこに、旧満洲当時の新京（現在の長春）にあった「満州映画協会」（略称：満映）のことが記されていて、満映理事長であった甘粕正彦について、「大杉栄殺しの下手人云々」という言葉が綴られていた。

私はかつて20代の半ば頃、週刊誌の記者をしていた時代、関東大震災の混乱の最中に、大杉が憲兵隊によって虐殺されたが、直接の下手人は甘粕正彦ではなかったという情報を接して取材した。「甘粕は大杉を殺してはいない」は、いわば定説を覆す説であり、これは場合によっては大きな記事になると思ったのだ。取材の成果は残念ながら実らず、記事にはならなかつたが、それ以降、甘粕については、墓場まで自らの〈汚名〉を背負って生きた男として、いたく同情心を持っていた。

そういう事情もあり、その満映に関する記事を見て、すぐさま編集発行人である田井光枝さんに疑問を呈するメールを送信した。すると折り返し田井さんから、ぜひ甘粕について書いてほしいという依頼があり、〈甘粕正彦と大杉栄〉というタイトルで、2012年5月号の「わんりい」に短い文章を書いた。その後「わんりい」には、3回ほど方正日本人公墓について書いたことがあった。

思わぬエスペラントについての依頼

それから3年ほど経った頃だったか。田井さんから、エスペラントについて書いてほしいという依頼が来た。では二、三回書きましょうと返事をして、原稿を送った後だったか。「興に乗れば、もう少し書くかもしれません」と田井さんにメールをしたところ、田井さんからも、「興に乗れば・・・いいですね。どうぞどうぞ、どんどん書いてください」と言われ、書いているうちに連載は結果的に、2016年の3月号から2018年10月号まで、2年半ほど、計33回になった。

これをまとめて一冊の本にできないかと思っていたところ、小さいながらもユニークな出版社である批評社が出版してもいいと言ってくれた。そうして、「わんりい」の連載原稿の一部を削除したり縮小したり、また新たに加筆して今回、『エスペラント一分断を繋ぐHOMARANISMO』という本になった。

この新著には、ザメンホフのこと、またエスペラントがどのようにして日本に伝わり、その日本から中国にどう伝わったかという経緯なども書いた。

そして、日本のユニークなエスペランティスト6人を挙げ、1章ずつ割り当てて書いた。その6人とは、日中戦争下の中国のから日本に向けて戦争反対をラジオで呼びかけた長谷川テル、その死を旧満洲で知り、日本に引き揚げた後、日本のエスペラント仲間に伝えた由比忠之進を〈彷徨える理想主義者〉として書いた。彼はベトナム戦争に加担した当時の佐藤栄作首相が訪米する前日、首相官邸前で抗議の焼身自殺をした人である。

その由比の同志でもあった伊東三郎は日本が敗戦した5年後、『エスペラントの父 ザ

メンホフ』(岩波新書)を出した。6人の中で唯一、私が驚嘆に接した人だった伊東のことは<清貧な理想主義者>として描いた。

その次が山鹿泰治である。山鹿はキリスト者からアナキストになり、中国のアナキズム運動にも貢献し、北一輝にも会い、北がエスペラントに関心を持つ契機になった男である。

そして大本(教)の聖師として親しまれた出口王仁三郎である。ちなみに開祖と言われるのが出口なお、と言われる女性で、王仁三郎は彼女の長女・すみと結婚し、教団を大きくした。彼については、章の表題を<「小日本」に抵抗したカリスマ>とつけた。

最後の一人が曹洞宗の寺の息子だったが、戦争中、教員をやりながらも大勢に抗して闘い、反戦の意思を、エスペラントを含む言語関係誌に発表した斎藤秀一である。^{ひでかつ}

この6人は、日本のエスペラント界の主流というか、大勢から見れば妥当な6人かと疑問を呈する向きもあるだろう。しかし私にとっては、アイザック・ドイッチャ一流に言えば、<非日本的な日本人>であり、多くの人々に知ってもらいたい存在なのである。

英語偏重主義への疑問

そして最後の章には、今や、「死滅している」かのように言われるエスペラントが、なぜ、どのように言われるのか、その現状について、エスペランティストであり、言語社会学の先生でもある上智大学教授の木村護郎クリストフさんにインタビューして、エスペラント界の現状、エスペラント界の新しい動き、「英語ハラスメント」と言われるほど、英語があたかも唯一の国際語と言われるようないびつな現状を明らかにしてもらった。

コロナ禍の世界的な蔓延状況を考えると、環境問題一つをとっても、世界的な発想で解決の糸口を探らないと解決できそうもない時代である。木村さんは、「やっと今、世界がエスペラントの理念に追いついてきた」と言う。分断が続く世界の中で、人類主義はますます見直される時代になってきた。いわば、ザメンホフの考えは世界を先取りした思想だと言つていいだろう。

ぜひ拙著をご笑覧いただき、ご叱正いただきたい。

(おおりい・よしひろ：本会理事長。著書『ある華僑の戦後日中関係史——日中交流のはざまに生きた韓慶愈』(明石書店)、共著に『風雪に耐えた日本人公墓——中国ハルビン市方正県物語』(東洋医学舎)、『満蒙の新しい地平線——衛藤瀧吉先生追悼号』(満蒙研究プロジェクト編集委員会編)など)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

5月下旬には大きい書店の店頭には出ていると思われますので、ぜひ手に取っていただければ嬉しい限りです。あるいは、地元の図書館に請求すれば、現在の図書館はすぐに入ってくれるはずです。また友人知人にもPRしていただければと思う次第です。どうぞ、よろしくお願ひします。

下記の記事は、<耕論>という名前で随時掲載された中、澤地久枝さんがインタビューされた記事です。この日の記事には、<新型コロナ この春 君に贈る言葉>と題して、シンガー・ソングライターの崎山蒼志さんが<無力感の中 見えたものも>、また小説家の西村賢太さんが、<不幸？ それは比べるから>と見出しの下、それぞれインタビュー記事が掲載されています。

澤地久枝さんには、本誌17号（2013年12月刊）に、<「開拓」、心の底に>という表題で寄稿していただいたことがあります。

冷静さと考える力 養つて



1930年生まれ。中央公論社退社後作家に。著書に「妻たちの二・二六事件」「14歳・満州開拓村からの帰還」。

澤地
久枝さん

ノンフィクション作家

私は90歳になりました。新型コロナウイルス感染症のニュースを見ていて、若い人に伝えたことがあります。

日本が第二次世界大戦に負けた1945年8月15日、中國東北部（滿州）で女学校の3年生だった私は、学徒勤員で陸軍病院で働かされていました。44年から授業はなくなり、1ヵ月間の開拓団への住み込み奉仕など「お国」のために働いていました。

私は「軍国少女」で、戦って死ななければならぬと真剣に考えていました。負けるなど夢にも思っていません。

当時の人々が病気にどんなに無防備で無策であったのかを知つて欲しいと思います。

それでも法定伝染病があり、私はその一つ、しょうこ

う熱にかかりています。幼い弟たちは痩弱と髄膜炎で亡くなりました。伝染病が日常的

私の同級生は高熱で聴力を完全に失いました。彼女も90歳になりましたが、今の日本の政治に怒っています。平和を世界に広げる日本の戦後だったはずなのに、と。

現在、私は毎月3日の午後1時、国会正門の前に立っています。民主主義や平和の大切さを思えば、コロナが怖い

そして黙つて立ち続ける私は、政治に慣る友人の声になります。ほかの多くの感染症と人間が「共存」の道を見つけたようになります。コロナもいずれ落ち着くでしょう。今は冷静さが必要です。恐怖にあおられて気持ちが萎縮してしまう弊害の方が心配です。特効薬がないのですから、うがいや手洗いを励行し、ごはんをきちんと食べて体力をつけるしかありません。

冷静さとともに自分の頭で考える力を養つて下さい。そのためにも、過去の人間の生きた事実を知る人たちの話を聞いて下さい。必ず何か得るものがあるはずです。

日本が第二次世界大戦に負けた1945年8月15日、中國東北部（滿州）で女学校の3年生だった私は、学徒勤員で陸軍病院で働かれていました。44年から授業はなくなり、1ヵ月間の開拓団への住み込み奉仕など「お国」のために働いていました。負けるなど夢にも思っていません。当時の人々が病気にどんなに無防備で無策であったのかを知つて欲しいと思います。

度を超す高熱と意識不明の日々を経て2人が死ななかつたのは、旧陸軍で医療に従事した人が、生理食塩水の注射を受けたおかげと聞きました。40

しかし、このとき感染した

（聞き手 編集委員・駒野剛）

東京新聞(2021年4月4日付朝刊)より転載

東京新聞の定評ある〈こちら特報部〉の記事 右頁から左頁に移ってお読みください。
(53P) (52P)

こちら特報部

共生阻む言葉の壁

専門の高齢者施設 わずか



上 中國殘留邦人専門のデイサービス「一笑苑」を立ち上げた佐々木所長
下 肉類調査のため来日、抱き合って喜ぶ中國殘留孤児ら=1998年、成田空港で

「一笑苑」を開いた佐々木さんは、中国殘留邦人二世。二十八歳の時、家族で母の故郷日本に来た。運送会社で働いていたが、二〇〇八年のリーマン・ショックで一ヶ月転職を考えていた時、一人暮らしの一世の女性高齢者宅を訪ねた時のことだった。女性は日本語が話せないため、足腰が不自由なのに助けを呼べず、九十九円のうどんばかりを食べて数日間過ごしていた。中国語が話せる佐々木さんが訪れる話で、「戦争で苦労した世代に、晩年までつらい思いをさせではない」と強く感じた。また、「つい」と泣き声が聞こえていた。馬場尚子センター(東京)の馬場尚子所

邦人専門の介護事業所を開業。埼玉や大阪などの七店に広げた。当初は店舗を借りる場所を見つけるのも苦労したが、今では地域の夏祭りに呼ばれるほど溶け込む。

「一笑苑」を運営する

一年に横浜で中国殘留

邦人専門の介護事業所を開

業。埼玉や大阪などの七店

に広げた。当初は店舗を借

りる場所を見つけるのも苦

労したが、今では地域の夏

祭りに呼ばれるほど溶け込

む。

だが、一笑苑のような施設はまだ少ない。厚生労働省によると、全国で八万に上る介護事業所のうち、中国語に対応できるのは三百八十カ所ほど。運営の多くは二世が担っており、調査を始めた一四年末の百八力所と比べて増えている

力所と比べて増えている

が、入所施設は少ない。

「施設でコミュニケーションが取れず、孤立して居づらさを感じる人は多い。中国帰国者支援・交流センターエー(東京)の馬場尚子所



慣れ親しんだ故郷の味を楽しむ「一笑苑」の利用者

原告団を母体に結成されたNPO法人「中国帰国者・日中友好の会」理事長の池田澄江さん(写真)と監事の高橋カツさんは「支援

法のおかげで生活ができる」としつつ、「こう続ける」という。年を取ることで「私たちの人生は何だったのか」と思いは強まる。戦争の教育として、残留孤児の存在

は「中国殘留邦人について、

日本社会の理解はまだ足りていない。多様な背景を持つた人がいることを認め合

う」と指摘して、訴えた。「中国殘留邦人については、日本社会の理解はまだ足りていない。多様な背景を持つた人がいることを認め合って初めて共生社会といえる」

一九年四月には外国人労働者受け入れを拡大する改正入管難民法が施行され、同月時点の外国人労働者は百六十五万人(前年比13・6%増)と最多を更新。

鈴木さんは「入管法は入り口の政策にすぎない。受け入れ後の政策や環境整備が今後の課題だ」と話す。

旧溝呂のハルビン出身で、川崎医療福祉大の姜波教授(異文化理解)は「政府は「移民政策はどうなりますか」としつつ、「こう続ける」という。年を取ることで「私たちの人生は何だったのか」と思いは強まる。戦争の教育として、残留孤児の存在

は「中国殘留邦人について、日本社会の理解はまだ足りていない。多様な背景を持つた人がいることを認め合って初めて共生社会といえる」

る」と指摘して、訴えた。

「私は日本人」と訴えた人たちに十分償えたのか。話を聞いた孤児が夜間に工事をした高速道路を見るたびに考へる。(本)

健康問題に直結／二世への支援薄く

長代理は語る。厚労省は一七年から、介護事業所に向いて中国語で話し相手になる「語りかけボランティア」をスタート。センターが事業を担っているが、「ボランティアの半分は中國殘留邦人の二・三世。介護事業者側や帰国者自身にも周知し、介護制度の利用の壁を低くしていきたい」と見据える。

中国残留孤児については、〇一年に始まった国家賠償訴訟を機に、〇八年に改正中国殘留邦人支援法が施行された。残留邦人と配偶者に生活支援給付金が支

給されるようになった。

十五歳以上は十八万人を超える。國土館大の鈴木江理子教授は「日本では『労働力』という側面で外国人が捉えられることが多いが、現実には出産や育児、教

育、そして介護といったラフサイクルに伴う課題がある。労働者もやがて老いていくという認識の下、支援策が必要だ」と指摘す

る。

国賠訴訟のころ、中国残留孤児を取材した。長い間帰国を支援せず、帰国後も就職支援や日本語教育を怠った「祖国」。狭い部屋に大勢で住み、日々の丸の鉢巻きをしていました。「私は日本人」と訴えた人たちに十分償えたのか。話を聞いた孤児が夜間に工事をした高速道路を見るたびに考へる。(本)

IN THIS ISSUE

中国残留孤児ら 孤立する晩年

中国残留孤児の肉親を捜す本格的調査を一九八一年に国が始めて四十年。孤児の平均年齢は八十歳近くになった。だが、中国語に対応できる高齢者施設は依然少なく、文化や習慣の違いから孤立して晩年を過ぐる人は少なくない。日本で生きるとはどういうことか。「共に生きる」との意味を考えた。

(木原育子)

上、下、左、右。扉を開けると、中国語の元気な掛け声が聞こえてきた。お年寄りが輪になり、ゆったりと身体を動かしている。

東京都江戸川区の中国残留邦人専門デイサービス「一笑苑」。飛び交う言葉や掲示物は全て中国語。中國の流行歌が流れ、介護スタッフもほとんどが中国人だ。

所長の佐々木弘志さん（五〇）は「年を取るほど、慣れ親しんだ第一言語や味覚に戻る傾向は強い。無理のない環境で楽しく過ごしてほしい」と目を細める。昼食は中華料理が提供され、家庭料理の定番という蒸しパンや餃子が並ぶ。食後の麻雀も日常の風景だ。

たどり着いた笑顔咲く場所

戦争末期の混乱で旧満州（中国東北部）に取り残された子どもや女性たちの帰国が本格化したのは一九八一年から。帰国した時、孤児の多くはすでに四十、五十年代になっていた。

「やっと笑えるようになったかな」。妻の付き添いでデイサービスに訪れていた清野明さん（八〇）が片言の日本語で語ってくれた。父は終戦間近に召集され、四年八月十三日に中國で戦死。対日参戦したソ連軍の侵入で、四歳だった清野さんは母と二歳の妹と



「一笑苑」に通って身体を動かしながら、心穏やかな日々を過ごす清野さん夫婦=東京都江戸川区で

つらい戦後 決意の帰国 そして今

田村に暮らし、九〇年に鍼灸接骨院を開業。だが、二〇一年の東日本大震災で自宅も宿も津波にのまれた。高台で、津波から逃げた。

「高台で、津波から逃げる大勢の人を見ました。山の中では連兵から逃げ惑う人々の姿とどうしても重なつて…」。封印したはずの

山に逃げ、息を潜めて生き永らえた。「妹は下痢をした後、山の中で亡くなってしまった。悲しむ間もなく、ただ逃げ惑っただけでした」

戦後、母は中国人と再婚し、清野さんは養父に大切に育てられ小児科医に。帰国すれば医師免許は無効になるが、八五年に家族と共に帰本する決断をした。

三陸海岸沿いの岩手県田野村に暮らし、九〇年に鍼灸接骨院を開業。だが、二〇一年の東日本大震災で自宅も宿も津波にのまれた。高台で、津波から逃げた。

「高台で、津波から逃げる大勢の人を見ました。山の中では連兵から逃げ惑う人々の姿とどうしても重なつて…」。封印したはずの

中国残留邦人 第2次世界大戦末期、旧満州に肉親と離別するなどして残った中国残留孤児を含む日本人。厚生労働省による本格的な調査が始まり、2818人が残留孤児と認定され2557人が日本に永住帰国した。中国人の妻となった「残留婦人」らを含めると6724人が帰国。このうち3割を超える2201人が介護サービスを受けている。

戦争の記憶がよみがえる。「自然災害は人間の力で全般的に防ぐことは不可能だが、戦争は人為的な災害。話し合えば必ずなくなる」今は、東京にいる娘の近くに住む。「戦争さえなければ中国で生まれていなければいい。震災さえなければここにいない。多くの人に助けられて、ようやく憩いの場所にたどり着きました」

小野春子さん（八〇）は五歳で終戦を迎えた。家族の中で身体が弱かった小野さんだけが帰国できず、中国の養父母に育てられた。一九七七年に帰国したが、父は亡くなり、母は再婚して別の家族があつたため、娘と亡くなつたが、そんな時は認めてもうえなかつた。中国で撮った日本の両親が写った白黒写真が、かつて家族だった唯一の証し。中国では「日本人」、日本に戻れば「中国人」とののしられた。孤独を味わうこともあるが、そんな時は写真に語りかけてきた。

「私は、ここにいるよって長い年月を経て、ようやく自分の人生を少しあきらめてしまった。」「つらかった分、多くの人の縁と優しさもいただいた人生です」

朝日新聞（2021年1月16日付朝刊）より転載

瀋陽支局長の平井良和さんの記事である、ちなみに瀋陽に赴任される前に、本会事務局に訪ねて頂いたことがあります。（大類）

○○人」で紹介した王林起さんが、昨年11月末、肺がんで85年の生涯を閉じた。

山形県高畠町に「渡部宏」として生まれ、両親に連れられて旧満州へ渡った。終戦の混乱で家族5人をすべて失い、10歳で残り孤児となつた。中国の養父母の愛情に報い、最期まで北京で「王林起」として生きた。12歳年上の養母も年末、追うように旅立つた。

親族から「彼が大切にした『日本』の友人として会いに来てくれないか」と招かれて参列した葬儀場には、日本の歌が流れていた。

夕焼け小焼けの赤とんぼ

王さんが「山形の家の裏の小道で、僕を背負う母が歌つてくれたのを覚えている」と話していた歌だ。

棺に眠る王さんに、娘の海燕さん（47）が語りかけた。「今度生まれ変わったら、きっと、苦しみのない人生になるよ」。そして涙の奥の目に、強い意志を宿してこう続けた。「お父さんは自由になつた。もうどこに行つてもいいんだよ。日本に帰りたければ帰つてもいい。安心して。願いは必ずかなえるから」

海燕さんは昨夏、王さんに願いを託されて

いた。「自分が死んだら、山形の先祖の墓にこの6人の名を刻んでほしい」。渡された紙には「渡部宏」のほか、日本に帰れなかつた両親と弟2人、妹の名があった。

王さんは死を目の当たりにした母と上の弟だけでなく、軍に現地召集されて連絡が途絶えた父、逃避行の中で行方不明になつた妹と下の弟のことも「できることなら、探し出して日本に帰してあげたい」と、ずっと気に掛けていた。海燕さんは6人の名を刻むことにけじめをつけたかったのでしょう」と言う。

王さんは「骨はどうしてくれてもいい」と言つていたが、海燕さんは「一部でも日本に帰してあげたい、と考えている。もし実現が難しければ、海に散骨するかもしれない。海は、日本につながつてゐるから。

葬儀の後、親族の食事に加えてもらい、王林起さんのことを語り合つた。実直な性格で「長男」として慕われた彼は、中国のにぎやかで温かい家族の心の中などどまり続ける。もう一人の彼は、日本に帰るのだろうか。いつか山形の小道を訪ね、母の背で眠る宏一少年の面影を探そうと思う。（平井良和）

キヨカゼ

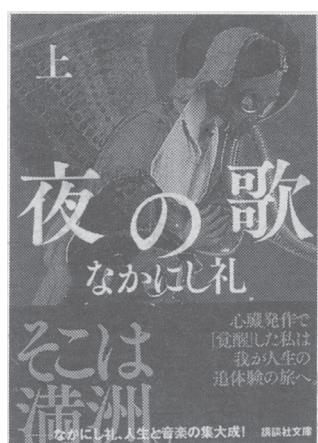
王林起さんの赤とんぼ

◆北京

書評

『夜の歌(上・下)』

なかにし礼 著



上
そこは満洲
なかにしの人生と音楽の集大成!
講談社文庫

なかにし礼は著名な作詞家であり作家。昨年12月に82歳で亡くなりました。『夜の歌』は、ガン治療を行ひながら「自分の人生を集大成した自伝的小説」とあり、幼少期の「満洲」からの引き揚げ体験と帰国後の作詞家になつてからのことなどが交互に語られます。戦争が終わってからのハルビンでの生活と引き揚げの描写は想像を絶します。

なかにしの父親は「満州國」で事業を営んでいました。侵略者としての「恵まれた」生活から一転して引き揚げの中では過酷な体験。日本政府は「あなた方がハルビン地区でようしく自活されることを望む」と見捨てました。

登場人物の言葉を借りて、「日本は、日本人すべてが中国人に害者」とりて、「日本は、日本人すべてが中国人に糾弾し、中國への侵略

は、ガソリンを行ひながら「自分の人生を集大成した自伝的小説」とあります。『夜の歌』は、幼少期の「満洲」からの引き揚げ体験と帰国後の作詞家になつてからのことなどが交互に語られます。戦争が終わってからのハルビンでの生活と引き揚げの描写は想像を絶します。

なかにしの父親は「満州國」で事業を営んでいました。侵略者としての「恵まれた」生活から一転して引き揚げの中では過酷な体験。日本政府は「あなた方がハルビン地区でようしく自活されることを望む」と見捨てました。

登場人物の言葉を借りて、「日本は、日本人すべてが中国人に害者」とりて、「日本は、日本人すべてが中国人に糾弾し、中國への侵略

は、作詞家としての「満州國」で事業を営んでいました。侵略者としての「恵まれた」アヘンも扱いました。侵略者としての「恵まれた」生活から一転して引き揚げの中では過酷な体験。日本政府は「あなた方がハルビン地区でようしく自活されることを望む」と見捨てました。

私は、作詞家としての「満州國」で事業を営んでいました。侵略者としての「恵まれた」生活から一転して引き揚げの中では過酷な体験。日本政府は「あなた方がハルビン地区でようしく自活されることを望む」と見捨てました。

私は、作詞家としての「満州國」で事業を営んでいました。侵略者としての「恵まれた」生活から一転して引き揚げの中では過酷な体験。日本政府は「あなた方がハルビン地区でようしく自活されることを望む」と見捨てました。

私は、作詞家としての「満州國」で事業を営んでいました。侵略者としての「恵まれた」生活から一転して引き揚げの中では過酷な体験。日本政府は「あなた方がハルビン地区でようしく自活されることを望む」と見捨てました。

私は、作詞家としての「満州國」で事業を営んでいました。侵略者としての「恵まれた」生活から一転して引き揚げの中では過酷な体験。日本政府は「あなた方がハルビン地区でようしく自活されることを望む」と見捨てました。

私は、作詞家としての「満州國」で事業を営んでいました。侵略者としての「恵まれた」生活から一転して引き揚げの中では過酷な体験。日本政府は「あなた方がハルビン地区でようしく自活されることを望む」と見捨てました。

私は、作詞家としての「満州國」で事業を営んでいました。侵略者としての「恵まれた」生活から一転して引き揚げの中では過酷な体験。日本政府は「あなた方がハルビン地区でようしく自活されることを望む」と見捨てました。

書評

『毛沢東の大飢饉』

フランク・ディケーター著／中川治子訳



本書は、1958年から62年に起きた中国の大飢饉をテーマとするフランク・ディケーターの著書を全訳した文庫本である。訳者は中川治子。私が宮城県連合会に事務局員として就職してから、今日もお付き合いの続いている中国残留孤児だったTさん

お話を内容は、当時の中国研究者たちの解説とは全く違う『大躍進』、人民公社化運動、自然災害』だったから、40年以上も前なのに記憶に残っている。もつとも、今では中

本書は、全編6部38章、本文500ページの大作だが、「文化大革命」以前で最も困難だった時期の状況を分かりやすく解説。中国の公式見解をもとに読みやすく整理され、さらに問題点が指摘されていく。登場人物や地名などはフリガナ付きで、

「訳者あとがき」では、今後に開明すべき課題と問題意識が提示され、日本の国民が現代中国と直結した関係をもつている現状に思いを新たにした。

(渡辺 裏)

草思社文庫、2011年2月発行。定価1,600円+税。

かから62年に起きた中国の大飢饉をテーマとするフランク・ディケーターの著書を全訳した文庫本である。訳者は中川治子。

お話を内容は、当時の中国研究者たちの解説とは全く違う『大躍進』、人民公社化運動、自然災害』だったから、40年以上も前なのに記憶に残っている。

本書は、全編6部38章、本文500ページの大作だが、「文化大革命」以前で最も困難だった時期の状況を分かりやすく解説。中国の公式見解をもとに読みやすく整理され、さらに問題

場面が目に浮かぶようえった。この大飢饉の惨状を聞いた記憶がよみがえった。

お話を内容は、当時の中国研究者たちの解説とは全く違う『大躍進』、人民公社化運動、自然災害』だったから、40年以上も前なのに記憶に残っている。

本書は、全編6部38章、本文500ページの大作だが、「文化大革命」以前で最も困難だった時期の状況を分かりやすく解説。中国の公式見解をもとに読みやすく整理され、さらに問題

場面が目に浮かぶような叙述も読みやすい。この大飢饉の惨状から「文革」の暴政10年間へ続く現代中国が、その深い反省から現在の改革開放の路線へつながる意味がようやく見えてきた。

方正日本人公墓が私たちに問いかけるものとは・・・

—「方正友好交流の会」へのお誘い—

1945年の夏、ソ連参戦に続く日本の敗戦は、旧満洲の「開拓団」の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒のなか、飢えと疫病によって多くの人たちがハルピン市郊外の方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人の松田ちゑさんは方正県政府に、「自分たちで埋葬したいので許可してください」とお願いしました。その願いは方正県政府から黒竜江省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、「方正地区日本人公墓」が建立されました。

1963年、まだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない時期、中国政府は、中国人民同様わが同胞も日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ5000人近い人たちが祀られているこの公墓の存在は、未だ多くの人たちに知られておりません。

私たちは、民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって維持管理されている公墓の存在を、多くの人たちに知ってほしい、そして旧満洲における日本国家と日本人の中国への加害と被害を多くの人たち伝えていく、国家や民族を超えた民衆レベルでの友愛精神を広めていくと「方正友好交流の会」を設立しました。ぜひ皆さま方のご支援ご協力をいただきたいとお願いする次第です。どうぞよろしくお願ひいたします。

個人会費 一口 1,000円 団体・法人会費 一口 10,000円
(口数は最低一口、上限はありません)

方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 日中科学技術文化センター内
電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 Email:ohrui@jcst.pr.jp
郵送振込口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会
HPアドレス <http://www.houmasa.com/>

＜報告＞ ありがとうございました！

前号の 31 号入稿後、2020 年 12 月 1 日以降にご送付いただいた会費及びカンパされた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、2021 年 4 月 9 日付までの分です)

石井敏夫 伊藤昭 斎藤兵一 さいたま市大宮日中友好協会事務局 大島満吉 芹澤昇雄
牧野八郎 福久一枝 篠田欽次 池川玲子 塚原常次 可児力一郎 柳瀬恒範 小倉光雄
橋本聰 岡崎雄兒 新宅久夫 中嶋定和 渡辺一枝 山口真 塚田恵子 崎山ひろみ
山井広伸 根田春子 佐藤すみ江 阿部則司 小出公司 斎藤實 田澤仁 平良長政
上条八郎 NPO 法人やまなみ 宮城恭子 及川淳子 木村護郎クリストフ 貞平浩
神田さち子 東海林次男 高橋守男 山田敬三 林秀行 團野廣一 肥後茂樹 藤井盛
桐山貞夫 北澤吉三 依田高明 甲斐国三郎 宗重勇 卷口弘 稲田堅太郎 阿久津国秀
田中正昭 村田和代 森博勇 鳥居光代 松本嘉子 大西広 川合継美 渡辺溥司
柳瀬文恵 高木昂 末広一郎 有馬雅嘉 中井詔太郎 加藤毅 上西隆全 高橋健男
高橋章 西岡秀子 篠原淳子 水野恵子 窪田かづよ 柳澤永一 高田京子 大西房子
亀山英雄 吾孫子隆 三原容子 藤原作弥 松成亮太 藤後博巳 杉田春恵 岡百合子
酒井哲夫 千田優子 小玉正憲 中島幼八 清嶋一順 新井孝之 竹井成範 米濱泰英
滝永登 渡辺英美子 黒木皆夫 江藤昌美 小林淨子 松島貞治 鈴木春夫 烏島せい子
井上定彦 山内るり 猪股祐介 横井幸夫 斎藤春夫 掛谷敏男 藤勝徳 栗林稔
早川浩市 大山茂 新海博枝 鈴木幸子 星野信 井出亜夫 風間成孔 石井妙子
加藤聖文 広田彰夫 竹内良男 十時哲哉 北村栄 黒岩満喜 馬場信韶 秋吉任子
清水醇 松村静子 櫻庭ゆみ子 大野正夫 田中佐二郎 酒井武史 久保和男 野中酉夫
島辰夫 赤羽茂乃 松浦俊海 皆川純麿 大田宣也 長谷川順一 上野千鶴子 岩間孝夫
岡庭成巳 平沢千恵子 新谷陽子 河村康彦 山口榮一 中澤道保 春日井治 宮岸精衛
長澤保 伊原泰子・忠 長尾寿 伊藤善久 清水孝一 櫻井正美 松本莉恵 島隆三郎
飯島春光 宮腰直子 柳生じゅん子 武村恵理 小柳保征・公代 黒井秋夫 及川康年
馬場永子 下山田誠子 久保田熙 高橋美好 出口直子 住田正明 浅田勝美 山本武
南村豊實 中野圭子 金成弘美 野崎朋子 南雲英雄 岩下寿之 田宮昌子 小池イヨ子
小西庫一・小西和 須貝佑一 付強 宮下春男

《編集後記》

4月10日の土曜日に事務局長の森一彦が原稿をチェックするために事務所に来てくれた。午前中の仕事を終え、昼飯を食べ終えて話した時だ。「大類さん、よくやっていますね」という言葉が彼から出た。

文面から見れば、誉め言葉とも言えるかもしれないし、「お疲れさま」とも言えそうだが、もしかしたら、私の疲れた顔を見て、「もうこのあたりでこの会報も終わりにしても

いい時期じゃないですか」とも取れそうだ。

正直に言えば、毎号この編集業務の終盤に差し掛かると、本当に疲れてきて、衝動的だが、もう止めたいと思うこともあった。

実は、2007年に私が朝日新聞のコラム「私の視点」に<日本人公墓を知っていますか>という原稿が掲載された時、それを読んだ森が電話をくれ、「感動しました。何か私にも手伝うことはありませんか」と言ってくれた。

森とは本会の事務局がある日中科学技術文化センターの母体になった向陽社という会社の同僚でもあった。彼はその後、より大きな会社に移り北京の駐在員にもなった。いわば、気心も知れた森からの支援の申し出に、いいも悪いもない。ぜひ手伝ってほしいと言って、最終段階での原稿の校正と発送業務を手伝ってもらうようになった。発送業務は森以外にも多くの人が手伝ってくれている。

さて、先の会話の折り、私は「会報を出すことによって、いろいろな人との新しい出会いもあり、あと5年は続けたいね」と森に言った。私に代わって森がやってもいいのだが、彼自身が発達障害の青年たちの社会復帰という意味のある仕事を今、精力的にやっているところだから、私に代わって本格的に本誌の編集業務ができる状態ではなく、最後の原稿のチェックぐらいを手伝ってもらうしか今のところできないのが実情なのだ。

さて、本号はいかがでしょうか。前号の31号は、引間正好さんの話に感動したという声がたくさん聞こえ、今号にも2編、感想の原稿を掲載した。本誌の巻頭にもってきた滝永登さんの原稿は、本来は前号に掲載するものだったが、私が滝永さんのメールを見落として前号に掲載できなかった。彼から一言、「返信はないが、原稿は見てくれましたか」という電話でもあれば良かったのだが。しかし彼が悪いのではない。私のミスである。こういうこともあるので、寄稿直後に「ありがとう」という私の返信が三日経っても来ない時は、ぜひ「原稿は見てくれたか」という電話をいただきたいと思います。

旧友でもある滝永さんには本当に申し訳なかったが、しかし今号に掲載できた上、柳生じゅん子さんの感想文も届いて、引間さんの話の余韻がまだ続いているような気がして、たいへん良かったと思っている。

ぜひ今後も会員、読書諸氏の原稿を歓迎します。基本的には、ワードで左右30mm、本文は10・5ポイント、長くとも10頁以内でお願いします。

表紙写真提供・王希奇さん

『星火方正～燎原の火は方正から～』(第32号) 2021年5月1日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email : ohrui@jcst.or.jp

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 日本分譲住宅会館 4F

(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

